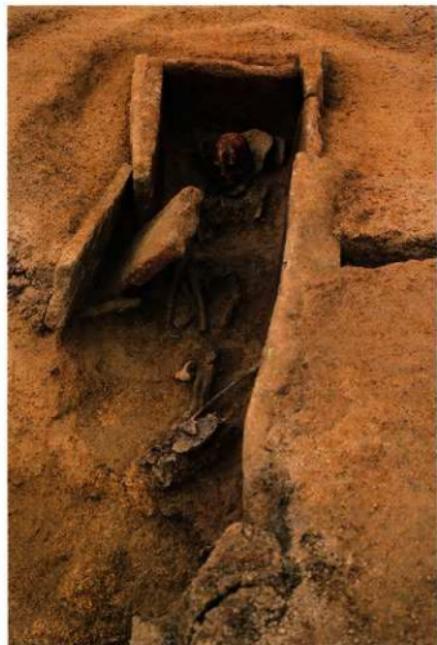


宗形神社古墳

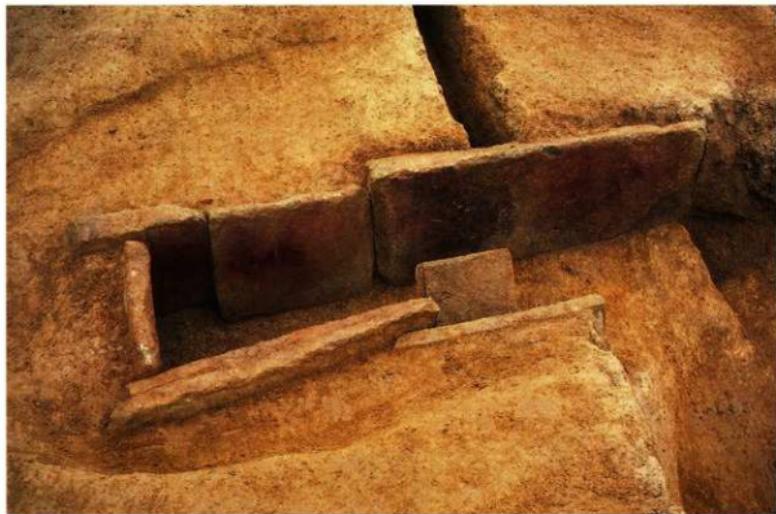
1999年3月

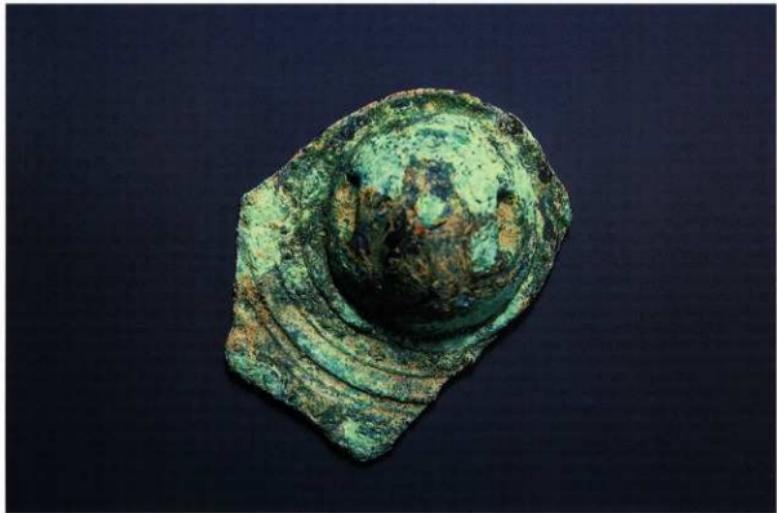
岡山市教育委員会



1. 箱式石棺と人骨

2. 箱式石棺（掘りあげ後）





1. 鏡



2. 玉類

序

「真金吹く」と詠まれた吉備の中心に位置する岡山市では、温暖な気候と豊かな水、鉄をはじめとする鉱物資源に恵まれた風土もあり、古くから独自の文化がはぐくまれてきました。そのため、わが国でも有数の古墳や遺跡やそのほかの文化財が密集する地域となっています。これらの文化財はそこに暮らす市民の歴史的基盤をなすかけがえのない財産であるとともに、祖先の生きたあかしそのものです。岡山市教育委員会では、歴史・文化的継承と発展、文化的環境の整備・充実の一環として、この貴重な文化遺産を永く子々孫々に伝え残すために、その保護・活用に取り組んでいます。

最近は「古代史ブーム」と言われ、特に埋蔵文化財に対するみなさまの関心も高まっており、連日考古学関連の報道がマスコミをにぎわしていますが、これは同時に開発に伴う発掘調査の増加を表しているものとも言えるでしょう。岡山市におきましても、急速な都市化、開発の増加・大型化は埋蔵文化財にとりましては危機的な状況を招来させています。こうした開発に対応するため、当教育委員会では分布調査や発掘調査成果の蓄積により埋蔵文化財の存在状況の把握、周知化に努めておりますが、土中に存在するという埋蔵文化財の性格上必ずしも十分なものとは言えません。

このたび報告する宗形神社古墳も、新たに発見された古墳です。幸い、この古墳は地元大窪地区的住民のみなさま、宗形神社氏子のみなさまの御努力と御協力により現状で保存することができました。この古墳は山と見まごうばかりの巨大な古墳がならび存在する吉備におきましては、決して大きな古墳とは言えませんが、大窪地区を見下ろす丘の上に築かれており、この一帯を治めた有力者の墳墓に違いありません。地域の歴史はもとより、吉備や古墳時代の研究にとりましても貴重な資料になることは疑いないでしょう。将来にわたって、地元の歴史を語る文化財として活用されるよう願うとともに、当教育委員会としましても協力を惜しまない所存です。また、本書がその一助になりましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施と古墳の保存に御理解と御協力くださいました、大窪のみなさま、宗形神社氏子のみなさま、有益な御助言を頂きました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

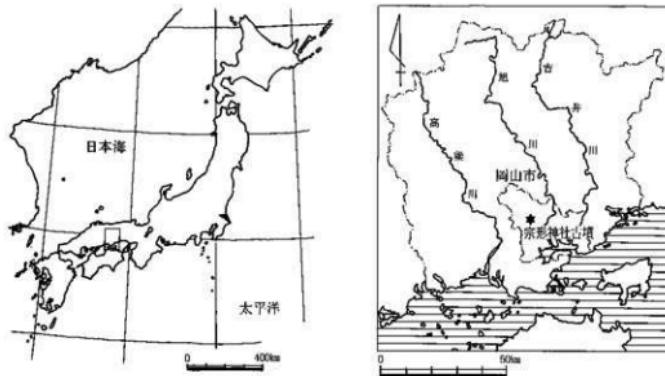
平成11年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 戸 村 彰 孝

例　　言

1. 本書は、岡山市教育委員会が平成9年度に実施した宗形神社古墳の発掘調査報告書である。
この古墳は、岡山市大庭193番地の宗形神社境内にあり、境内の整備工事に伴って新たに発見された。その保存措置を講ずるため、同神社や大庭地区をはじめとする地元の方々の協力を得て発掘調査を実施したものである。
2. 発掘調査と報告書作成は岡山市教育委員会生涯学習部文化課が行った。
3. 発掘の実務は乗岡実・安川満が担当し、神谷正義・崩崎由など他の文化課職員の応援を適時に受けたほか、藤井裕之・大西千鶴が参加した。
4. 本書の編集は乗岡が行い、執筆と図版作成は乗岡と安川が分担した。
また、鏡片の布痕について岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの小林青樹氏、人骨について岡山理科大学の川中健二氏、赤色顔料について別府大学の本田光子氏に玉稿をいただいたので、付章に掲載した。さらに付章には、関連遺跡として新規に確認できた芳賀新池古墳の測量成果を合わせている。
4. この報告書に用いている高度値は標準海抜高度である。また、方位は磁北である。
5. この報告書にかかわる出土遺物（人骨は除く）、実測図・写真などは、岡山市教育委員会にて保管している。



第1図 宗形神社古墳の位置

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査の経緯と経過	7
第3章 遺 構	9
第4章 遺 物	15
第5章 ま と め	20
付 章	
第1節 鏡片に付着する繊維製品について	26
第2節 人骨について	27
第3節 赤色顔料について	33
第4節 芳賀新池古墳の測量調査	34

挿 図 目 次

第1図 宗形神社古墳の位置	例言
第2図 周辺遺跡分布図 ($S=1/25000$)	3
第3図 磐ヶ部古墳の墳丘 ($S=1/400$) と石室 ($S=1/100$)	5
第4図 宗形神社境内の地形 ($S=1/600$)	7
第5図 周辺の地形図 ($S=1/5000$)	8
第6図 墳丘測量図 ($S=1/300$)	9
第7図 箱式石棺 (蓋石除去前) ($S=1/30$)	10
第8図 箱式石棺・墳丘の断面 ($S=1/30$)	11
第9図 元位置から動いた石棺材 ($S=1/30$)	11
第10図 箱式石棺 (蓋石除去後) ($S=1/30$)	12
第11図 棺内の人骨 ($S=1/10$)	13
第12図 石棺内遺物出土状況	15
第13図 鏡実測図 ($S=1/1$)	17
第14図 鉄器実測図 ($S=1/2$)	18
第15図 玉類実測図 ($S=1/1$)	19
第16図 管状計測値分布図	20

第17図	岡山県内の箱式石棺の大きさ	21
第18図	鏡片付着繊維の分布 ($S=1/1$)	26
第19図	宗形神社古墳出土の人骨頭蓋骨 (写真)	31
第20図	芳賀新池古墳の位置 ($S=1/5000$)	34
第21図	芳賀新池古墳の墳丘測量図 ($S=1/200$)	35
第22図	芳賀新池古墳の箱式石棺実測図 ($S=1/20$)	35

表 目 次

表1	石棺内出土遺物一覧	16
表2	玉類計測表	19
表3	宗形神社古墳・一宮天神山古墳群比較表	24
表4	宗形神社古墳出土人骨計測値および示数	30

図 版 目 次

卷頭 1	1. 箱式石棺と人骨 2. 箱式石棺 (掘りあげ後)	
卷頭 2	1. 鏡 2. 玉類	
図版 1	1. 参道から見た宗形神社 2. 墳丘と社殿 (背後) 3. 箱式石棺の蓋石	
図版 2	1. 棺内の人骨 2. 1号人骨上半身 3. 2号人骨頭部と1号人骨脚部	
図版 3	1. 墳頂と箱式石棺 2. 石棺北辺石材の加工痕 3. 石棺東小口材の研磨?痕	
図版 4	1. 人骨取り上げ後の石棺 2. 復元後の石棺 3. 副葬鉄器	

第1章 位置と環境

1. 古墳の位置と一宮平野周辺の景観

むかわかなじんじや こ ふん
宗形神社古墳は笹が瀬川と、その支流である中川、砂川により形成された小平野—仮に一宮平野と呼ぶことにする—の北端部、飯盛山いなもりやまから南に派生する尾根先端に突出した小丘陵上に立地する。この地域は律令期の行政区分では備前国津高郡馬屋郷に属している。その後は明治維新に伴う町村制施行により大窪村、明治22年には松尾、芳賀、福谷、長野、横尾の5か村と合併し馬屋下村、また、昭和30年には一宮町、平津村と合併し一宮町に、さらに昭和46年に岡山市と合併し今日に至っている。

一宮平野は南北に細長い平野であり、北半部にあたる中川、砂川流域は西、北を名越山、三光山など吉備高原の南端をなす標高200m近い山並みと、東側を芳賀、佐山周辺の比較的なだらかな丘陵とに挟まれている。この東西の地形的差異は、丘陵部は果樹園などに開墾されており、近年は宅地化も進んでいるのに対し、山地は鬱蒼とした雑木林であるなど土地利用にも現れており、一宮平野北部の景観的特徴となっている。

中川を境界に西側、北側の山地は、大部分が中生代に形成された花崗岩を母岩とするもので、浸食によりなだらかになった老年期の山地～準平原が再び隆起したものである。その上面に旧輪廻の地形が残されており、急峻な山道を登り詰めると、急になだらかな丘陵の続くひらけた地形になるのはこのためである。一方、中川以東のなだらかな丘陵は「山砂利層」と呼ばれる砂礫層の丘陵であり、第3紀後期から洪積世にかけての河川堆積物と考えられている。こうした流域の地質構造の差は、砂川、中川の特徴の差となっている。

砂川は岡山市日応寺付近に源を発し、約15kmの距離を流れ笹が瀬川に合流するが、その流域の90%近くを花崗岩地帯が占めている。そのため、山容は急峻で谷は深く、水系は花崗岩の節理に沿って格子状に形成されている。また沖積地部では天井川化しており、その名の示すとおり、洪水時に多量の砂—花崗岩の風化土を押し流すが、その砂の透水性により平常時は伏流している。

一方、中川は岡山市富原に源を発し、笹が瀬川に合流するまで延長距離約9kmを測る。流域の40%近くは砂礫層地帯であり、丘陵はなだらかで谷は浅く広いものとなっている。また、砂礫の堆積も著しくなく、細粒の堆積物で構成されるため伏流することなく絶えず川水が流れている。

この砂川、中川両河川と笹が瀬川により形成された一宮平野は広義の岡山平野の一部であり、瀬戸内海と吉備高原に挟まれた平野群の一部である。一宮平野は厚いシルト層の堆積する低湿な平野である。近年まで大安寺付近には三日月湖が存在しており、現在の国道180号線周辺でも海拔1.8m程度の高さしかない。この地区は、砂川、中川の堤防に囲まれている、国道、JR吉備線が堤防の役割を果たしているなど現代的原因もあるが、こうした低い地盤と扇状地・氾濫原から三角州低地に移行する遷移点付近にあたることから排水不良の土地であり、ポンプによる排水施設が整備される以前は大雨毎に冠水していたと言う。

一宮平野の形成史をみると、最終氷期最盛期には海面の低下により瀬戸内海は陸地化していたと言われ、笹が瀬川は旭川と合流、塩飽諸島付近を分水嶺として東流し、大阪湾付近で古大阪川に合流し紀伊水道から太平洋に注いでいた。岡山市平津付近のボーリングデーターによると地表下約30m付近以下に沖積基底礫層と考えられる砂礫層があり、一宮地域も谷になっていたものと思われる。後氷

期には「繩文海進」と呼ばれる海進により海が深く浸入した。海進の最盛期には沖積地部分は大半が水没していたと思われるが、その実態はほとんど未解明である。一宮平野もこうした谷部に浸入した海を埋める形で発達した沖積平野ととらえられる。しかし、旭川、足守川流域平野に比べその発達は遅かったようで、弥生時代、古墳時代の遺跡は平野中央部には存在せず、山麓や大窪周辺の扇状地上に限られている。現在、一宮平野のほぼ全域に条里制地割りと条里制開闢の字名が残っており、古代の段階には一宮平野のかなりの部分が陸地化し、開墾されていたことが窺われる。しかし、辛川市場付近を境に北は「半折形」、南は「長地形」の地割りが分布することから、そこを開発時期の違いを指摘する説もある。747年(天平19年)に成立した『大安寺縁起併流記資財帳』によると、「堺江」、尾上・花尻付近とされる「比美葦原」、大安寺付近とされる「長江葦原」といった記事が見え、一宮平野の南部は葦ヶ瀬川に沿って入り江状になっており、その両側は未だ未開拓の湿地帯がかなり広がっていたことがわかる。

参考文献

- 高橋達郎・福岡義隆・斎藤伸英ほか 1983『岡山県史』第1巻 自然風土
 斎藤久次・海津正倫・中村和郎・中山二男 1995『東西に延びる内海と山なみ—中国・四国の自然』『日本の自然 地域編 6 中國四国』岩波書店
 森山伸一・三宅精一・国分寛仁・中山博賀ほか 1970『一宮町の歴史と現代』地域研究第14集 岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会
 草原孝典1993 「第1章 位置と環境」『小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会

2. 宗形神社古墳と周辺の遺跡

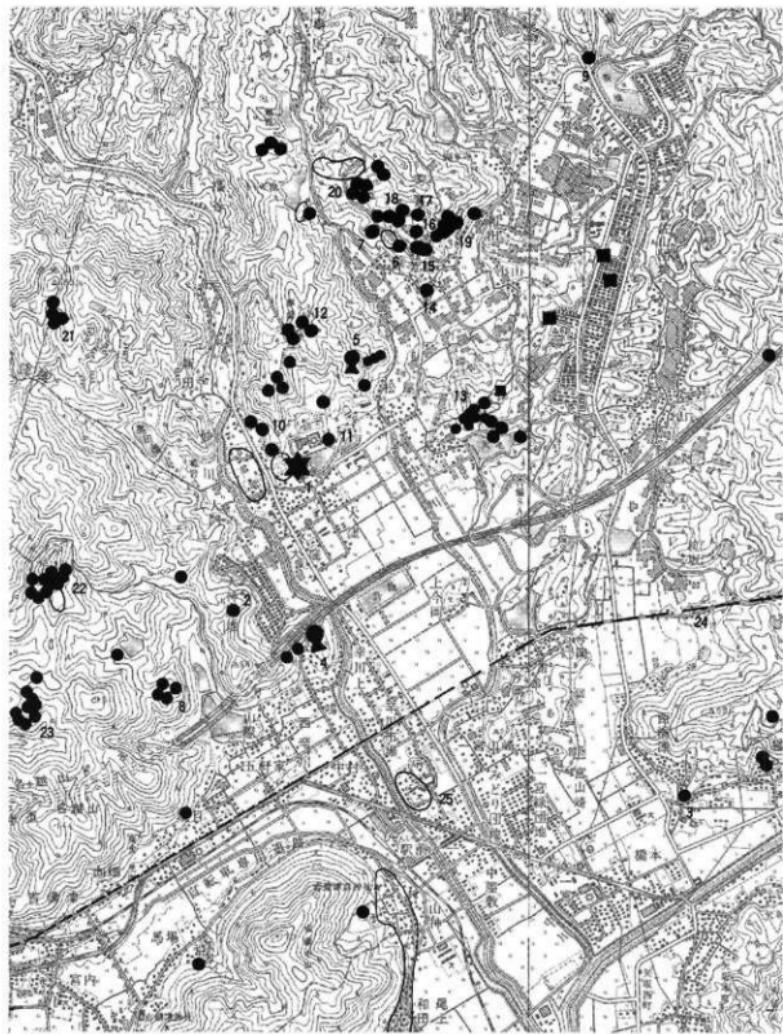
一宮平野は宗形神社古墳が築かれた頃、入り江や湿地帯が深くまで入り込んでいたようで、旭川や足守川流域のように、自然堤防が発達しその上に集落が展開するといった状況とはかなり様子が異なるようである。実際、現在確認されている遺跡は、山麓部や扇状地部分に限られ、平野中央部にはほとんど確認されていない。

その中で福谷、大窪の扇状地上に立地する遺跡は、宗形神社古墳や周辺の古墳の展開上で注目される。福谷磯ヶ部周辺からは弥生時代後期前半の土器が出土しており⁽¹⁾、また、大窪の扇状地上でも広い範囲から土器などが採集されるという⁽²⁾。遺跡の規模や構造、継続期間等詳細は不明だが、遺物の散布する範囲などからかなり大規模な集落遺跡と考えられ、觀音堂弥生墳丘墓や一宮天神山古墳群、宗形神社古墳らの母胎となった集落と考えてよいものと思われる。

觀音堂弥生墳丘墓⁽³⁾は大平山から北東に延びる標高50m程度の尾根上に立地する。墳形や墳丘規模ははっきりしないが、直線的に延びる列石が2列検出されており、方形あるいは長方形の墳丘と推定されている。埋葬主体は3基あり、うち第一主体から管玉1、鉄剣1が出土した。また、横溝にも横溝弥生墳丘墓⁽⁴⁾が存在する。

横溝弥生墳丘墓は坊主山山塊から南西に延びる丘陵上に立地していた。墳丘の規模・形態などは不明だが、堅穴式石槨1基が存在しており、硬玉製勾玉、碧玉製管玉4が出土した。

この2基の弥生墳丘墓は詳細な時期は不明だが、主体部の規模や構造などは岡山市矢藤治山弥生墳

第2図 周辺遺跡分布図 ($S = 1/25,000$)

1. 宗形神社古墳
2. 銀音堂弥生墳丘墓
3. 楠津弥生墳丘墓
4. 一宮天神山古墳群
5. 飯盛山古墳
6. 宮山1号墳
7. 宮山2号墳
8. 若山古墳群
9. 芳賀新池古墳
10. 碓ヶ部古墳
11. 宗池古墳
12. 飯盛山古墳群
13. 松尾大池古墳群
14. 東庄塚古墳
15. 万成塚古墳
16. 耳切塚古墳
17. 耳切北ノ塚古墳
18. 耳切池奥古墳群
19. 打越塚古墳群
20. 後山南谷古墳群
21. 三光山古墳群
22. 大平山古墳群
23. 名越山裏山古墳群
24. 古代山陽道推定ルート
25. 小丸山遺跡

丘墓⁽⁵⁾、総社市宮山弥生墳丘墓⁽⁶⁾、井原市金敷寺裏山弥生墳丘墓⁽⁷⁾などの堅穴式石槨と類似しており、弥生時代最終末の墳墓と思われる。このように弥生時代の最終末には小規模ながらも墳丘墓を出現させる首長層の成長がこの地域にも認められている。しかし、特殊器台をはじめとする祭祀土器を伴っていないことは、吉備内部におけるこの地域首長の限界を同時に表しているものととらえられる。ただし飯盛山周辺には尾根上に弥生土器の散布する地点が存在している。また、宗形神社北側の丘陵上からは特殊器台が採集されたとの情報もあり、未確認の弥生墳丘墓や集団墓群が存在する可能性もある。

周辺の古墳時代前期の古墳には一宮天神山1号墳、一宮天神山2号墳、飯盛山古墳などが存在する。一宮天神山古墳群⁽⁸⁾はかつては天神山七つ塚古墳群と呼ばれており、前方後円墳1基（2号墳）、円墳3基が確認されていた⁽⁹⁾。一宮天神山1号墳は直径20~30mの円墳であり、堅穴式石槨1基が確認された。石槨内部は盗掘により荒らされていたが、三角縁仏獸鏡1面の他、鉄刀、土師器が存在した。また、一宮天神山2号墳は墳長60m以上の前方後円墳であり、後円部に堅穴式石槨2基が「T」字形に直行して存在した。南北を向いたA主体からは斜縁獸形鏡、鉄刀、鉄劍、鉄斧、銅鏡が、東西を向いたB主体からは捩文鏡、橫文鏡、首飾りと両腕の腕飾りに相当する3群の玉類、鎌・斧・槍・刀子などの鉄器類が出土している。

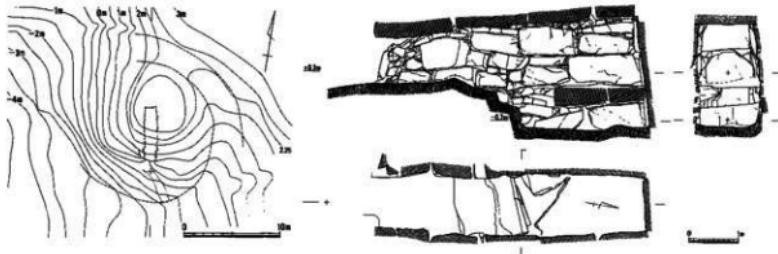
飯盛山古墳⁽¹⁰⁾は墳長約35mの前方後円墳であり、後円部に堅穴式石槨1基が存在している。副葬品等の内容は不明であるが、墳形は前方部が直線的に長く延びる柄鏡形と言われ、一宮天神山1号墳に後出し、一宮天神山2号墳に併行するか、やや古い時期に築造されたとされている。

また、芳賀地域にも小規模な円墳、方墳が数基知られており、宗形神社古墳との関連上注目される。これらの多くは、平野部、谷部に突出した小尾根上に単独、あるいはそれに近い状況で立地しており、宗形神社古墳の立地と共通する。築造時期など詳細は不明だが、箱式石棺の露出するものも存在しており、宗形神社古墳の被葬者と同様の階層の人物、おそらくは古墳から見下ろせる範囲に基盤を持つ小首長層の墳墓と思われる。

ところで、古墳時代前期以降、この地域には前方後円墳など大規模な古墳が存在しない。宗形神社古墳をはじめとする小規模古墳も単独に近い状況で存在しており、系列的な展開が認められない。こうした状況は5世紀代に、旭川流域などで大型前方後円墳の築造が停止することや、逆に足守川流域に造山古墳、作山古墳が築造されることと連動する変化ととらえられる。この変化に関しては、畿内の古墳群が柳本・大和古墳群から佐紀古墳群へ、さらに古市・百舌鳥古墳群へ移動することから想定される畿内中枢の政治的状況を反映したものとの指摘、あるいは大阪府古市・百舌鳥古墳群のように造山・作山古墳周辺が古墳築造の中核、「古墳コンプレックス」を形成していたとの指摘⁽¹¹⁾もあり、一宮平野北部地域ばかりではなく吉備全体、あるいは畿内中枢の政治状況を視点に入れた検討が必要であろう。このような変化がどのような政治的再編制を反映したものかは今後の課題に委ねるにしても、この中で一宮平野北部の首長たちは相対的に低い位置に留まっていたものと評価せざるを得ない。このような古墳の築造停止を首長の政治的没落ではなく、畿内に移動し中央豪族化した可能性を指摘する意見もある⁽¹²⁾。しかし、古墳時代の畿内の王権と地方豪族との関係が、埼玉県鶴山古墳出土の鉄劍銘にあるように、近衛隊長的な人物と思われる「杖刀人首」の子孫であっても、その本拠地と考えられる埼玉古墳群に墳墓を造営している関係であるとするならば、4世紀末から5世紀初頭の段階で本拠地である一宮平野北部地域に古墳を残さない形で畿内への移住が行われたとは考えにくい。

一方、古墳時代後期に至ると数多くの横穴式石室墳が築かれるようになる。これらの古墳は山麓から山腹にかけて数基から十数基からなるグループをなして存在しているものが多く、石室規模も幅1m前後から1.5m程度、長さ5m程度の小規模なものが多い。その中で、福谷の磯ヶ部古墳⁽¹³⁾は玄室に巨大な板石を横方向に架した石棚を持つ古墳であり注目される。測量調査からは直径14mを測る円墳とされるが、外護列石と考えられる板石が墳丘角付近にたっていたという情報⁽¹⁴⁾もあり、方墳である可能性もある。石室は全長5.7m、幅約1.2~1.3mの無袖の横穴式石室で、奥壁から長さ約2.6mにわたって巨大な板石3枚からなる石棚を造り付けている。構造時期は、面を整えた切石状の石材を使用していることから7世紀前半と考えられ、周辺の古墳群中最も新しいものの一つととらえられる。石棚を持つ古墳は、県内では他に備前市惣田12号墳・長船町轟2号墳、岡山市稻佐太郎塚古墳、岡山市高松稻荷佐太郎塚古墳、矢掛町橋本荒神塚古墳(橋本15号墳)の5基が知られている⁽¹⁵⁾。岡山県内の石棚を持つ古墳に関しては、両側壁で挟み込み、奥壁には入り込まないという石棚の構築法において共通するとされ⁽¹⁶⁾、また、高さがやや低く、石材の厚さが厚く、長さが長い点が特徴ともいう⁽¹⁷⁾。石棚を持つ古墳は、九州や和歌山県を中心に分布していることから、紀氏などの古代氏族との関係も論じられる。しかし、横穴式石室の形態 자체はそれぞれの地域の特徴を備えたものであり、特定の石室形態に結びついて広がってはいないことが指摘されており⁽¹⁸⁾、単一の氏族に結びつけることは難いように思われる。

また、周辺には日応寺の塙原製鉄遺跡、田益の小原山製鉄遺跡など製鉄関連遺跡も確認されており、津高の奥池古墳群など製鉄炉、製炭炉に隣接して存在する古墳群も存在することから、この地域の古墳群においても製鉄に携わった集団によるものも多く存在することが予想される。



第3図 磯ヶ部古墳の墳丘(S = 1/400)と石室(S = 1/100)
(注13文献より、一部改変)

注

- (1) 片山峯吉 1971『馬屋下村史』馬屋下村
- (2) 草原孝典 1993『第1章位置と環境』『小丸山（中山中）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (3) 近藤義郎 1991『弥生墳丘墓の成立と展開』『岡山県史』第二巻原始・古代Ⅰ 岡山県史編纂委員会編 岡山県
- (4) 錦木義昌 1978『猪津古墳発掘調査報告』猪津古墳発掘調査団
- (5) 近藤義郎編 1995『矢張治山弥生墳丘墓』矢張治山弥生墳丘墓発掘調査団
- (6) 高橋謙・錦木義昌・近藤義郎 1986『宮山墳群』『岡山縣史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会編 岡山県
- (7) 斎藤忠彦・斎藤蘋子 1968『岡山県井原市金倉寺裏山古墳』『金倉考古館研究集報』第5号 倉敷考古館
- (8) 錦木義昌・亀田修一 1986『一宮天神山古墳群』『岡山縣史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会編 岡山県
- (9) 注(8)文献。『高市埋蔵文化財分布地図』では前方後円墳1基、円墳2基が記載されている。
- ⑩ 注(2)文献
- ⑪ 松木武彦 1998『中国地方の中期古墳とその社会』『第44回埋蔵文化財研究集会中期古墳の展開と変革—5世紀における政治的・社会的变化の具体相(1)—』埋蔵文化財研究会
- ⑫ 注(2)文献
- ⑬ 高田恭一郎 1996『岡山市鐵ヶ部古墳の測量調査—石棚をもつ横穴式石室(1)』『古代吉備』第18集 古代吉備研究会
- ⑭ 神谷正義氏の御教示による
- ⑮ 平井勝 1995『中・四国の石棚をもつ古墳』『古代学協会四国支部第9回徳島大会資料』古代学協会四国支部
- ⑯ 平井勝 1997『岡山県久留美町橋本荒神塚古墳(橋本15号墳)の測量調査』『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
- ⑰ 佐藤光範氏の御教示による。
- ⑱ 注(6)文献

3. 宗形神社について

宗形神社古墳の立地する宗形神社は、『延喜式』神名帳にその名がみえる、いわゆる式内社である。祭神は多紀理比売命、市杵烏比売命、多紀津比売命の三女神である。九州の宗像大社を勧請したものと伝えられるが、天保年間以降の修理、改築等の記録をのぞくと記録に乏しく成立やその後の沿革に関しては全くわかっていない。また、現在の宗形神社が延喜式にある宗形神社に直接つながるものかどうかかも不明と言わざるを得ない。『馬屋下村史』に引用された『大庭村誌』⁽¹⁾によると、出典は不明だが馬矢郷西人寺庄、馬屋郷笠ヶ瀬等⁽²⁾に社領があったという。なお、現在の社殿は昭和12年に吉備津彦神社改修の折りの仮殿を移築したものである。

(第1章 安川 潤)

注

- (1) 片山峯吉 1971『馬屋下村史』馬屋下村。なお、『大庭村誌』に関しては、原典に当たることができなかった。また、『大庭村誌』の探索にあたっては、岡山市文化財モニター竹原秀大氏らの協力を得た。
- (2) 西人寺庄、笠ヶ瀬はいずれも御野郡に属しており、(津高郡)馬屋郷、馬矢郷とするのは誤りであるが、原文のまま引用した。

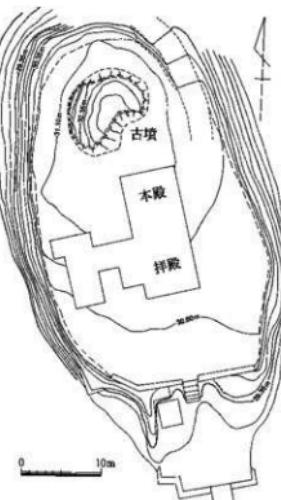
第2章 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

この古墳は、岡山市大窪193番地の宗形神社境内にある。境内は尾根上を削って造成された結果、かなりの平坦地となっており、その真ん中には本殿や拝殿が建っている。ところが本殿のすぐ裏（北側）だけは高さ2mほどの高まりがあり、その存在を誰もが簡単に気付ける状況であった。この高まりこそ宗形神社古墳の墳丘であったが、この種の古墳をけっこう見慣れている氏子や地元の方々の間では古墳としての認識はまったくくなかったし、岡山市教育委員会が1983年に作成した「岡山市埋蔵文化財分布地図」などでも記載から外れていた。尾根の隆起部の削り残しに思えたのか、あるいは本殿に近過ぎて意識に残りにくかったのであろうか。

そうした状況のもとで、氏子の方々を中心に境内の整備工事の計画が持ちあがった。この工事は小規模なものであったが、二つの目的があった。一つは、境内西側の尾根斜面に自然の露岩があって麓の民家に転落する恐れがあることから、地盤がゆるむ梅雨末期さらには台風シーズンの到来を控えて、傍に穴を掘って露岩を埋め込んで、危険を未然に防ぐことである。もう一つは、急な階段が続く徒歩専用の表参道とは別な、北からの取り付け道路を伝う自動車での参拝の便宜を図るために、本殿の北にある高まり（古墳本体）を削平して、駐車スペースを確保しようとするものであった。

1997年7月7日、この工事は着工された。まずバックホーを露岩のところに降ろすため、進入路として高まりと本殿の間が選ばれ、高まりの南東から南裾にかけての掘削が行われた。この掘削が高まりの中心に近い個所におよんだ時、一気に三枚の板石が動き、地中に空間が開いた。空間の奥には頭蓋骨があつて覗く人に対面し、動いた板石に塗られた赤色顔料は雨に濡れて鮮やかさを増し、神秘的な雰囲気をかもしだした。工事は即刻中断され、地元では神社で人の骨が出たとの情報が伝わって雨天にもかかわらず多くの人々が集った。いっぽう、大窪の町内会役員や氏子の方々は、これが新発見の古墳との確証のもと、岡山市教育委員会文化課に通報した。出宮徳尚文化財専門監と乗岡実主任・安川満文化財保護主事が現地に駆けつけ、関係者と話し合いを行なった結果、古墳をこれ以上削らない範囲でバックホーを通行させ露岩の工事は行なうが、古墳を削平して駐車場にする計画は中止し旧状に復して保存を図ること、露出してしまった箱式石棺を対象に最低限の発掘調査を行なうなどの方向づけが確認され、翌日に市役所内で正式協議の場がもたれた。文化財保護法にもとづく、宗教法人宗形神社代表役員伊丹正秋からの遺跡発見の届出は7月8日付け、岡山市教育委員会教育長名（丁村彰孝）の埋蔵文化財発掘調査の報告は7月13日付で提出され、それぞれ適切に事務処理された。



第4図 宗形神社境内の地形
(S = 1/600)

2. 発掘調査の経過

事実上の調査は発見翌日の7月8日に乗岡・安川の両職員を担当者として着手した。この日は、発掘は行わず墳丘測量を行なったが、午後から雨が激しくなって作業を中止した。9日は、墳丘測量の続きを行なうとともに、発掘に着手、まず箱式石棺を平面で確認するため、蓋石上の盛土の掘り下げから開始した。10日には、石棺東小口をかけた擾乱壙の底浚え中で鏡片が出土し、初の副葬品の確認とその質の高さに、現場の興奮が高まった。11日には、箱式石棺の蓋石の露出が完了、その写真撮影と実測を行なった。土曜・日曜の休日を挟んだ14日は、いよいよ蓋石を外し、棺内の掘り下げと清掃に取りかかり、一部の玉類を確認した。この作業は16日までに完了し、写真撮影と実測のち、人骨の取り上げを行ない、二体埋葬やその他の副葬品が明らかとなった。17日には、石棺本体の実測や土層断面図を作成し、周辺地形の追加測量などを行なった。18日は、転落した石棺材を元通り組み直す作業や後片付けに費やした。またこの日は、山陽新聞に報道記者が掲載されている。19日の土曜日は、地元町内や氏子の皆さんを主な対象とした現地説明会を開催し、児童もまじえた100人近い参加者には、石棺や副葬品の実物を前にした説明を熱心に聞いていただき、発掘調査の一応の完了とした。

その後の秋祭りまでに、氏子の皆さんの方で、人骨を再埋納して供養し、石棺を埋め戻し墳丘を復元する作業が行なわれた。また、岡山市教育委員会は1998年3月に古墳の説明版を設置している。

氏子や地元町内会の方々には、日々現場に足を運んでいただき、見学だけでなく、多大なご協力とご便宜をいただいた。また、調査期間の短さと調査体制の不備にもかかわらず、近藤義郎、水内昌康、西川宏、開壁忠彦、狩野久、稻田孝司の各先生には現場にお越しいただいて、総括的なご助言やご教示、それに励ましを賜った。さらに成果整理の過程で、箱式石棺について亀田修一、鏡について岸本直文、遺存繊維について小林青樹、玉類について高橋進一の各氏にご教示をいただいた。発掘調査を支えていただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

(第2章 乗岡 実)



第5図 周辺の地形図(S = 1/5,000)

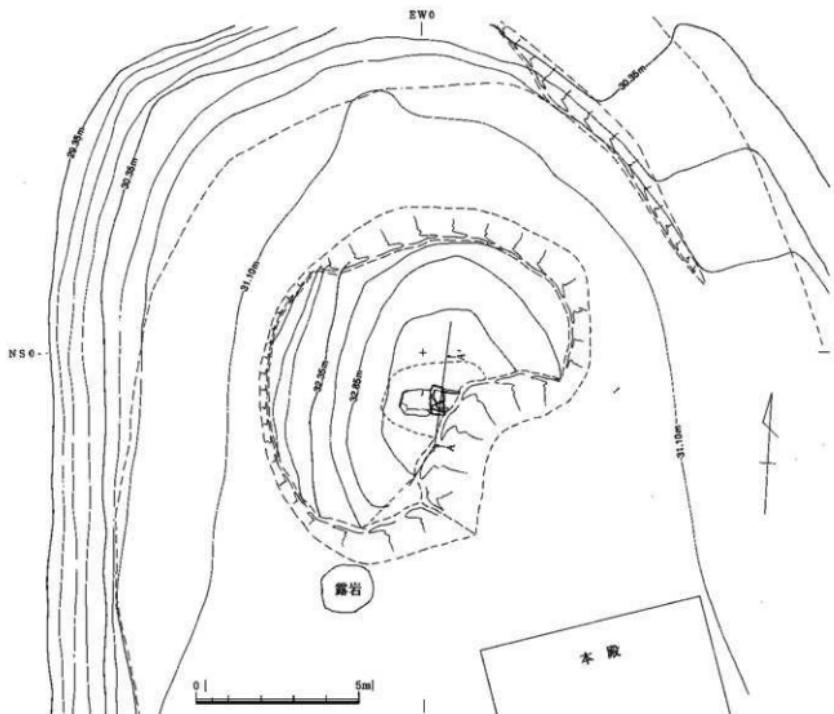
第3章 遺構

1. 墳丘の規模と形態

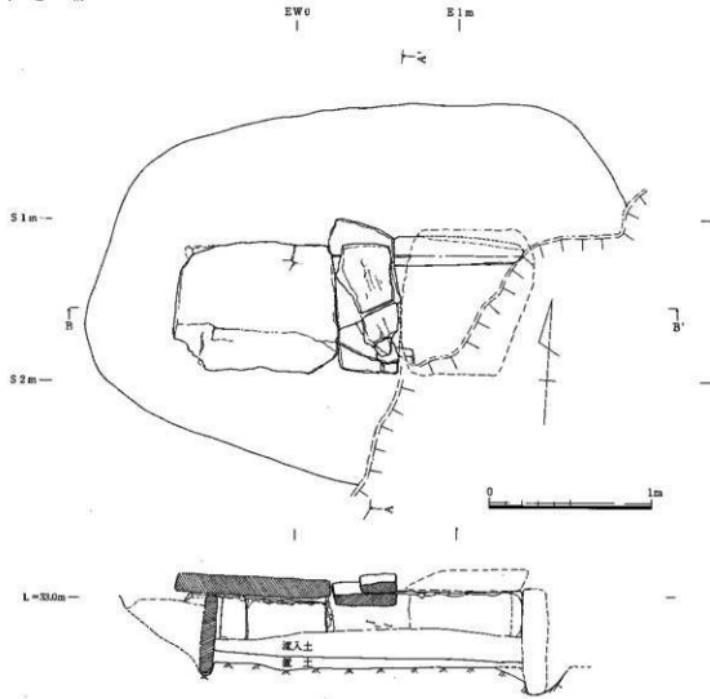
古くからの境内整備の過程で、墳丘はかなり改変を受けている。とくに裾部は、その急傾斜からして削平が著しく、墳端は中心寄りに後退している。測量図に示される南東からの大きな抉れは今回の工事によるものであるが、掘削面の新鮮さの程度と聞き取りなどから判断して、今回の工事直前での墳丘は、東西10.5m、南北11.5mの比較的整った円形、高さは2.0~2.1mといえる。

しかし、箱式石棺を中心に据え、改変の程度が弱いとみられる部分の墳丘の傾斜がそのまま墳端まで続いたとすれば、本来の直径は13.5m~14.0mに見積もれる。そうすれば、いま墳丘の南に露出する岩も、ちょうど墳丘内に隠されていたことになる。

墳丘の北半側では取り巻くように平坦地がある。その幅は現況で3.5m~4.0m、先の復元案に従って



第6図 墳丘測量図 ($S = 1/300$)



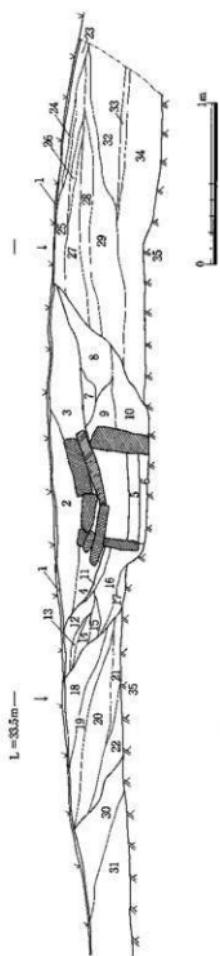
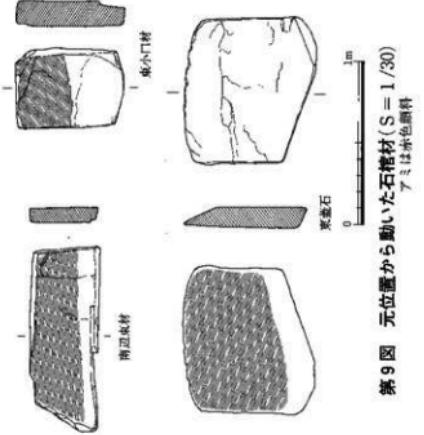
第7図 箱式石棺（蓋石除去前）(S = 1/30)

も、まだ2.5m~3.0mの幅が残る。この平坦地の評価の一案は、後世に墳壠を削り込んだ時に残土を斜面下方に均した結果とみることである。そうなら、本米の墳壠は現況よりかなり低い位置にあったことになり、そのぶん本来の墳丘高や径はいっそう増加する。もう一案は、この古墳には周溝があったか、墳丘盛土を得るために周囲の地山が広範に掘削され、平坦地はその名残とみる考え方である。

いずれにせよ、墳壠付近にトレンチを設定できなかったので、本来の墳丘規模は未確定である。尾根筋に沿って南の本巣側に前方部をもつ前方後円墳であった可能性も否定しきれない。前方部の存否とは別に、本墳が小独立丘の中心から北にずれていることも気掛かりで、拝殿付近に別の小古墳があった可能性も残っている。ただ現時点では、復元される直径14m内外、高さ2.5m足らずの円墳で、丘頂部に単独で存在したと考えておくのが妥当であろう。

2. 墳頂付近

東西に主軸をもつ箱式石棺がある。石棺横断の南北方向に上層の断面観察を行なった。保存のため墳頂部での墳丘の断ち割りは最小限にとどめ、北側は幅20cmほどの小トレンチを設定したが、南側は工事による掘削面をこれに代えて整えた。

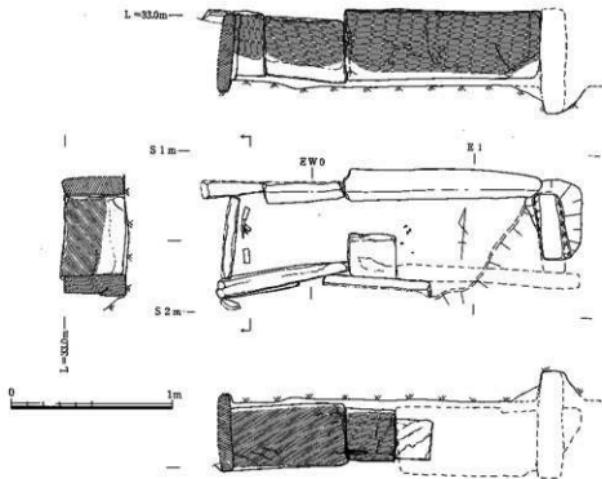
第8図 箱式石棺・壇丘の断面図 ($S = 1/30$)第9図 元位置から動いた石棺材 ($S = 1/30$)

墳丘の盛土は最大の厚さが60cmで、以深は花崗岩類の岩盤風化土が確認できる。その上面は平坦で、旧表土を示す黒色土が残っていない。したがって墳丘の下半は地山の削り出で、そのぶんの高さが1.5mはあったといえる。盛土の成分は、周囲の地山に由来するとみられる花崗岩バイラン質土が圧倒し、有機分を含んだ暗色土が薄く部分的な間層として入っている。またその堆積は水平でなく、中央より周囲に積む工程が先行する。削り出した地山の台状部端にまず土手状の輪をつくり、内の窪みに土砂を充填していく工法をとったのであろう。なお石棺から2.5m北まででは別の埋葬痕跡は確認できず、墳頂平端部の広がりを勘案すれば、箱式石棺が唯一の主体部であった可能性が強い。

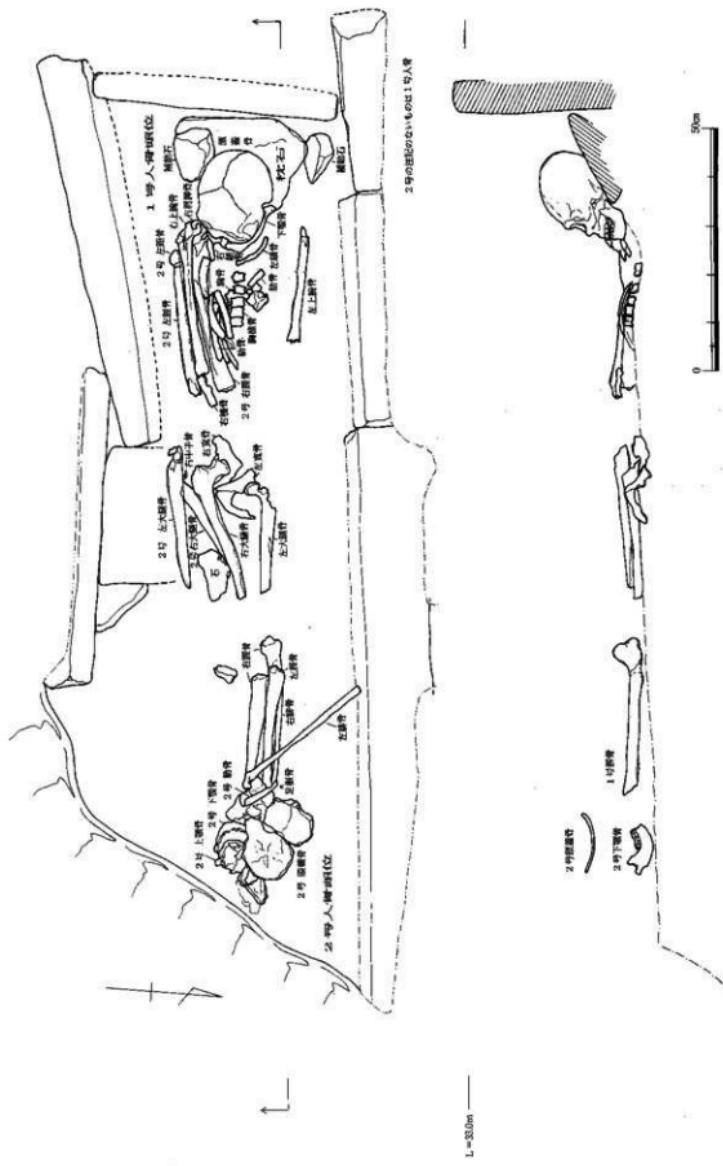
3. 箱式石棺

石棺構築のための掘りかたは、盛土の頂部から切り込まれ、地山に達している。深さは65cm、平面は東西240cm、南北340cmの小判形である。棺の組立てと併行したとみられる蓋石以深の埋土は、墳丘盛土と大差ないバイラン質土であるが、やや粒子が細かく均質といえ、一部に粘質土を含んでいる。しかし、粘質土は石棺を包んだり、石材間のメジを意図的に塞ぐものではない。蓋石を架けた後の上部埋土も同様であるが、両層の境界線（第8図のII層・V層間）は追葬に伴う掘りかたとも評価できる。蓋石上面から現墳頂までの埋土の厚さは10~20cmであるが、本来はもう少しあったに違いない。

棺身は長方形の板石を組むもので、その主軸はN（磁北）86° Eである。北辺は石材3枚を立てて横に置き、南辺もこれに準じるが半ばに裏うち用の補強材を一枚配している。小口は東西とも石材1枚で、東小口は石材の最長辺を高さにとっている。全体とすれば両側が小口を挟む組みかたである。また側材は地表面もしくは薄い置土に乗るだけであるのに、小口材は地山への取り付けが強固である。



第10図 箱式石棺（蓋石除去後）(S = 1/30)
アミは赤色顔料



第11図 棚内の人骨(S=1/10)

とくに東小口の下端は両側より22cmも深く、独立した掘りかたに下部三分の一を落とし込んでいる。蓋石は4枚で、両小口に架かる石材が大きく、半ばは小形の2枚が重なるが、薄いためか割れてしまっている。棺身・蓋石とも石材間の密着度が高く、その裏返しか、間詰めの小石が皆無である。

棺の内面には赤色顔料が塗られている。顔料がおよぶのは両側・両小口の埋葬面以上の全面と、東の蓋石である。側石と小口石の上端面、西の蓋石内面、南の側石の裏込材などでは確認できない。

棺を構成する石材は、蓋石の一部に流紋岩的なものを含むが、花崗岩類といってよい。蓋石は粗削材で、主剥離面が明瞭なものもあるが、断面形は平行四辺形であったり、主要面中にも稜をもつ。いっぽう、側材と小口材はさらに整った板形で、各面とも、なまんざく棺内側の面が極めて平滑である。粗削材をさらに二次加工したよう、上端面に接する角などは、細かな剥離痕が残され、北辺の東材や南辺の西材の棺内面などでは、ノミ状工具によるハツリ痕とみられる微妙な凹凸が観察できる。また東小口材の南短面中部は、砥石で研磨した可能性を考えてよいほど滑らかである。

今回の工事の手は南東からおよび、東小口材、南の側の東材、東の蓋石が現位置を失った次第である。復元的にみると、棺の内法は長辺が185~190cm、小口幅は東西とも50cmである。また埋葬面からの高さは30cmといつてよい。

埋葬面は地山面に厚さ5~10cmに土を敷いてつくりだされている。この置土は、赤色顔料が混ざる粘質土で、花崗岩バイラン質土とは異質の選土である。しかし良質の粘土を用いた粘土床とまではいい難い。また棺床には円錐敷きは認められない。埋葬面は全体が約900cm²に対し、工事による搅乱を蒙ったのは110cm²である。埋葬面を覆う流入土は厚さ5cm~25cmで、東側が分厚い。

4. 棺内の埋葬

人骨は二体分が互い違いに確認され、西枕で保存が良いものを1号、東枕のものを2号とした。

1号人骨は仰向けで、頭の下には長辺20cmあまりの枕石がある。枕石は特別な加工は認められないが、その傾斜によって人骨は30°ほど首をもたげ東小口側を向いている。また頭骨の左右にも小石材があり、頭の固定を補助したとみられる。中手骨の位置からして、少なくとも右手は腰の傍まで伸ばしていたようである。足は北に寄りながらも直に伸ばしていて先まで確認できる。棺内規模に対して余裕をもった伸展葬といえよう。こうした1号人骨の遺りかたに、蓋石が架けられた状況であること、棺内流入土が薄いことなども合わせて、この石棺は未盗掘であったと判断できる。

2号人骨の上半身は、頭頂が1号人骨足先より高位置で反転するのに、下顎は深く、肋骨とともに元位置を保たない。枕石も確認できない。対して、大腿骨・脛骨は生体時の配列をほぼ保ち、両足とも1号人骨の南に偏り、かつその下に潜り込んでいる。2号人骨は遺存部位そのものが少ない。

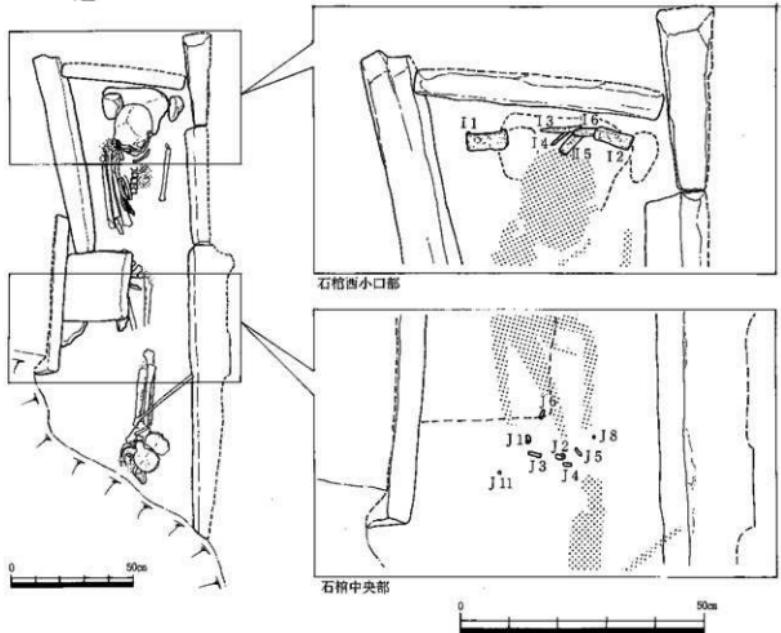
この状況から、二体は同時に埋葬されたものとは考え難く、1号人骨は追葬で、追葬時にまだ骨化進行中であった2号が小さく動かされたと考えるのが自然である。しかも、第3の人骨は確認できなかから、東枕の2号人骨こそが初葬であった可能性が高くなる。これは、石棺の東小口板が西小口よりも厚くて埋め込みも深く、南辺・北辺も東の石材は上端が高く分厚く形もあり整い、蓋石は東に限って赤色顔料が塗られていることなど、石棺の組みかたが東枕を意図したこととも合致する。

第4章 遺物

1. 出土状況

出土遺物は、墳丘盛土内から出土した時期不明の土器小片を除くと、箱式石棺内で確認できたか、本来は石棺内にあったと判断してよいものばかりである。これらは副葬の品もしくは埋葬時に被葬者が身につけていたものと考えられる。石棺内は木蓋掘で、流入土も薄く、遺物の一部は流入土の上面に露出している状態であった。鉄器類、土類、鏡があり、それぞれが位置を連えて置かれていた。

鉄器類は鍔先1、鉄斧1、鎌1、刀子2、不明鉄器1の計6点が1号人骨の枕石と西小口板の間に置かれていた。本来、初葬である2号人骨の足下に置かれたものか、追葬に伴い1号人骨の頭位側に置かれたものか判断が難しい。しかし、1号人骨の頭蓋骨や枕石の下になるものが一つとしてないことから、1号人骨の埋葬に伴って副葬されたものである可能性が高い。もちろん、1号人骨埋葬時点では下敷きにならないよう移動された可能性も考えられるが、2号人骨自体はさほど動かされず1号人骨の下になっていることからすると、鉄器に対してのみそうした気遣いをしたとは思われない。また、鉄器類には木質が残存せず、また収める空間も存在しないことから、柄などは装着しない状態であったとみられる。



第12図 石棺内遺物出土状況

品目	出土位置			備考
	石棺西小口部	石棺中央部	遊離	
鉄先	I 1			
鉄斧	I 2			
刀子	I 3・I 4			
鎌	I 5			
不明鉄製品	I 6			
勾玉		J 1		
ガラス製勾玉		J 2		
管玉		J 3～J 6	J 7	
ガラス小玉鏡		J 8・J 11	J 9・J 10 鏡式不明鏡片	棺内？東小口付近

表1 石棺内出土遺物一覧

玉類には、後に棺内埋土を水洗した時点で検出したものも含め、硬玉製勾玉1、ガラス製勾玉1、管玉5、ガラス小玉4の計11点がある。これらは石棺のほぼ中央付近に、散乱した状態ではあるが、一定の範囲に集中して出土した。1号人骨では膝付近にあたり、1号人骨のものと思われる手や指の骨もより西側に存在しており、残存状態が悪いため特定できないが、2号人骨の腰ないし腕付近にあたるものと思われる。腕輪等につながった状態ではないが、20～30cmの範囲に集中しており、もとは2号人骨の腕に巻かれていた可能性がつよい。

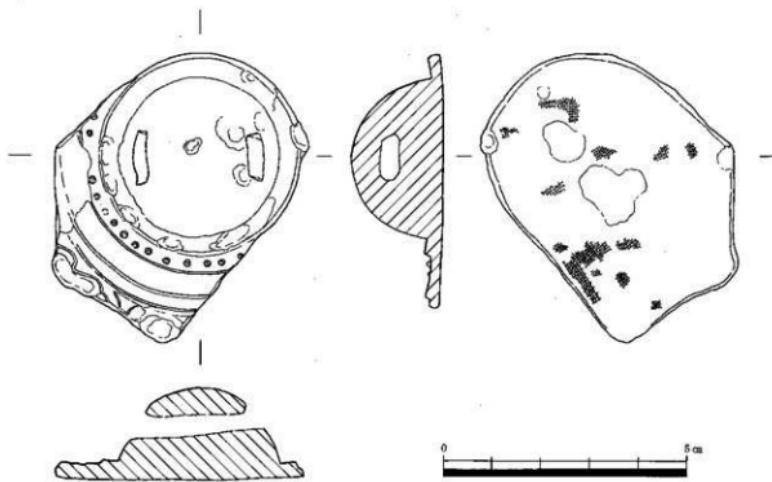
鏡は、石棺東小口をかけたバックホーによる攪乱坑の下部から出土した。本来の嚴密な配置は特定できないが、棺内の2号人骨の頭付近に置かれていたものと思われる。

2. 鏡

鏡は鉢及び鉢座部分を中心とする5～6cm程の不定形の破片である。周辺の割れ口は摩滅、あるいは研磨されており、副葬時すでにこの形態であったものと判断できる。残存状態は悪く、鉢、鉢座、鏡面の一部に光沢のある黒灰色を呈する部分、鏡面の一部に白銀色を呈する部分もあるが、全体に黄緑色～白緑色の鏽に覆われており、内部まで鏽が進行しているようである。

鉢は径34.2mm、高さ約15mmを測り、鉢下端から4.5～7.0mm上に幅8.0～8.6mm、高さ3.8～4.0mm、断面長方形の鉢孔が存在する。厚さは鉢座、内区の薄い部分で約2mmを測る。鉢座は幅広く幅約1.5cmで珠文帶等を配している。その外側に内区(主文)がわずかに残る。鏽・腐食、それに残存する内区が極めて一部であるため文様の意匠は不明だが、細線による文様ではなく、さほど肉厚な文様でもないようである。また、鏡面には一部に紹織物と思われる織物の痕跡が認められる。副葬時に丁寧に布に包まれていたものと考えられる。(付章第1節参照)

鏡の大きさなどから、この鏡片はもとは径15～20cmほどの中形鏡と考えられる。また、鉢座の構成は両像鏡、獸形鏡、神獸鏡の一部、だ朧鏡等に類似したものがあるが、鏡式を特定することはできなかった。



第13図 鏡実測図(S=1/1)

3. 鉄器

鍔先 (I 1)

鍛造の鉄製品で、短円形の鉄板の両側を折り曲げている。全幅9.4cm、長4.0cm、厚さ0.4cmを測る。手鎌の可能性もあるが、装着痕や木質の残存などは認められない。

鉄斧 (I 2)

鍛造の袋状鉄斧である。全体に残存状態は悪く、身部と袋部の境界付近は大きな鋸の塊になっており折り曲げの状況など観察することができない。また、袋部内には不明鉄器1点が接着している。全長は8.7cm、平面形は長方形に近く刃縁部でわずかに広がっている。刃縁は外湾しており、刃縁部幅4.2cm、身部厚さ1.3cmを測る。刃は鈍く、丸い面があるよう見える。袋部は断面形が歪な椭円形で、長径3.4cm、短径2.8cm。厚さは、内部に土などが詰まっているため正確に測ることができないが、0.3~0.4cm程度とやや厚手な印象をうける。

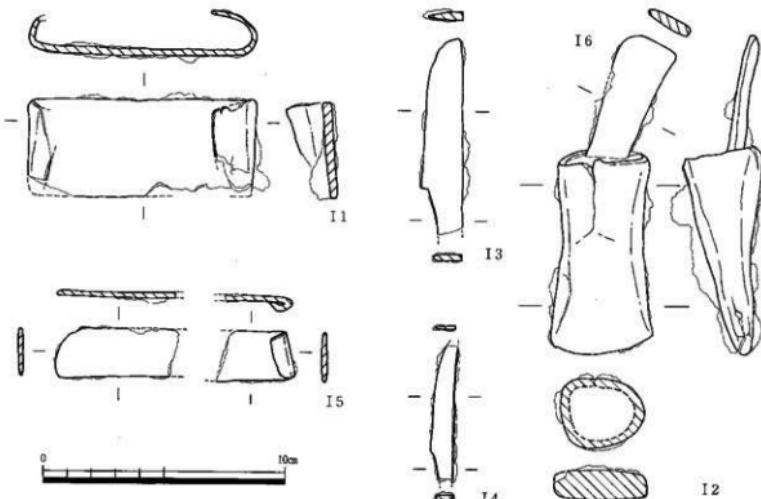
刀子 (I 3・I 4)

刀子は2点が出土している。I 3は茎が中程で欠損しており、残存長8.1cm、身部長6.2cm、関部での幅1.8cm、最大厚0.4cmを測る。茎は最大厚0.3cm、関部で幅1.4cm、先端に向かって徐々に細くなり、欠損部分では幅1.0cmとなっている。柄の装着痕や木質は認められない。

I 4は小形のもので、茎の中程からと鋒が欠損している。残存長5.5cm、身部残存長4.3cm、関部での幅1.0cm、身部の最大厚0.2cmを測る。茎は厚さ0.25cm、関部から屈曲して徐々に細くなっている。欠損部分では幅0.6cmを測る。これも柄の装着痕や木質等は認められない。

鎌 (I 5)

I 5は接合しない2点の鉄片であるが、厚さ、幅、出土状況から同一個体とみて間違いない。短冊

第14図 鉄器実測図 ($S=1/2$)

形の鉄板の片側端部をやや斜めに丸く折り曲げており、最大幅2.1cm、2点をあわせた残存長は8cm程度である。厚さは0.25~0.30cm、断面は片刃になっており、かなり小形であるが鎌と思われる。

不明鉄器（I 6）

I 6は鉄斧の袋部内に錫着したもので、基部と考えられる側は袋部内であるため観察できない。身部は短冊状で袋部からでている部分の長さ5.5cm、先端側がわずかに幅広くなってしまっており幅2.3cmを測る。厚さは0.5cm程度で、断面は片刃状になっている。I 6は、厚さの違い、基部側が不明である等断定しきれないが、I 5と形態的に類似しており、これも鎌である可能性が高い。

4. 玉類

勾玉

硬玉製のもの（J 1）とガラス製のもの（J 2）が存在する。硬玉製勾玉（J 1）は灰白色～明オリーブ灰色に明緑灰色～灰白色の縞に入る色調を呈する。小形で扁平な形状で、いわゆる半狄状勾玉に近い形態ととらえられる。最大長14.0mm、最大幅9.4mm、最大厚4.4mmを測る。紐穴は両面穿孔である。

ガラス製勾玉（J 2）は半透明のやや緑がかった濃青色を呈するもので、最大長10.4mm、最大幅6.3mm、最大厚3.8mmの小形品である。扁平で屈曲もわずかであり、表面には気泡が多く観察できる。胴部の内側の面には微細な「しわ」状のものが観察できる。紐穴は、左側面側がわずかに狭くなっているうえ、右側面の紐穴の端部が稜を成すのに対し、左側面のものは角が割れたか、取れたようになつており、右側面からの片面穿孔である可能性がある。

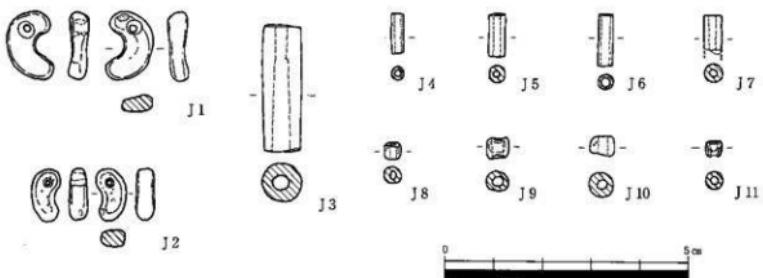
管玉

管玉は5点が出土しており、碧玉製と見られる。長さ10mm程度、径3~4mm程度のもの（J 4~J 7）と長さ26.4mm、径7.7mmを測る大形のもの（J 3）が存在し、色調では灰白色~明緑灰色を呈するもの（J 3, J 5, J 6）と緑灰色~濃緑色を呈するもの（J 4, J 7）に分けられる。紐穴はJ 4~J 7が穿孔後研磨されているようだが、J 3では両面穿孔による段が残っている。

ガラス小玉

ガラス小玉は4点が出土している。色調はガラス製勾玉と同じく半透明の縁がかった濃青色を呈する。J 8・J 11は長さ径とも3.4~3.6mm程度であるのに対し、J 9・J 10は長さ4.0mm、径4.2~4.8mmと長さ4.2mm、径5.1mmとやや大きく形も歪である。

(第4章 安川)



第15図 玉類実測図(S = 1/1)

No	種類	法量(単位:mm)			色調	材質
		最大長	最大幅(径)	最大厚		
J 1	勾玉	14.0	9.4	4.4	灰白色~明オリーブ灰色	碧玉
J 2	勾玉	10.4	6.3	3.8	やや緑がかった濃青色	ガラス
J 3	管玉	26.4	7.7		灰白色~明緑灰色	碧玉
J 4	管玉	8.5	2.9		濃緑~緑灰色	碧玉
J 5	管玉	9.1	3.8		明オリーブ灰	碧玉
J 6	管玉	11.6	3.2		灰白色	碧玉
J 7	管玉	(7.8)	3.7		緑灰色	碧玉
J 8	小玉	3.6	3.6		やや緑がかった濃青色	ガラス
J 9	小玉	4.0	4.8	4.2	やや緑がかった濃青色	ガラス
J 10	小玉	4.2	5.1		やや緑がかった濃青色	ガラス
J 11	小玉	3.5	3.4		やや緑がかった濃青色	ガラス

表2 玉類計測表

第5章 まとめ

1. 古墳の年代

副葬品は、古墳時代の細かな時期区分の指標となるものを含まないが、古墳時代前期の典型的な組み合わせと言える。また、鏡は予想される鏡式がそう中期的なものでないし、鏡片としての副葬⁽¹⁾は弥生時代後期から古墳時代前期の中小の墳墓に集中し、北部九州以外の地域では古墳時代初頭以降に登場する要素である。

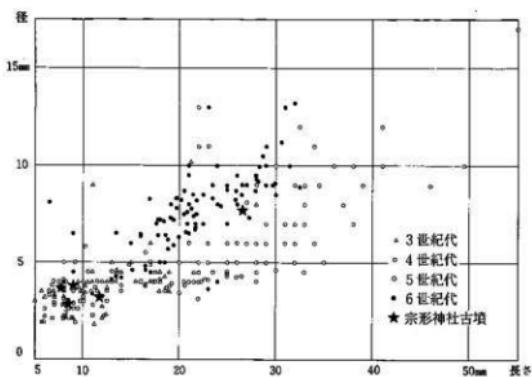
玉類について、高橋進一によると⁽²⁾、小形勾玉+

小形細身の管玉+ガラス小玉に限れば弥生時代的な組成という。しかし、注目されるのはJ3の管玉である。J3は他の管玉に比べ大形であり、紐孔も両端から穿孔した際の孔の食い違いが残っており、仕上げの研磨が施されていないものとみられる。管玉の径と長さは時期的に変化する⁽³⁾。これにJ3の管玉を当てはめると5世紀代の特徴を持つと言える(第16図)。また、孔内の仕上げの研磨が施されていないこと、やや軟質で淡い色の碧玉が使用されていることも新しい要素と評価される。J3以外の玉類や鏡片は、長く伝世した後に副葬されたとも考えられる。

宗形神社古墳の副葬品は、弥生時代以来の伝統的あり方を色濃く残しながらも、新しい特徴を具えたものを含んでおり、その築造時期を細かく絞ることは難しく、前期後半から中期前半(4世紀後半~5世紀前半)とやや幅を持たせて考えておきたい。

2. 箱式石棺

特徴の一つに、長さが190cm、幅が50cmという内法規模の大きさがある。第17図に岡山県下の古墳時代前期・中期の箱式石棺の法量分布を示したが、そのうち宗形神社古墳の石棺は、確かに大形の部類に入っている。その状況は長さより幅の点で鮮明である。棺の大きさ、とくに幅の広さは、人間一人の大きさを考えると、余裕をもった埋葬空間といえる。それは、複数埋葬を考えると一概にはいえなようにも思えるが、当例よりずっと小さな箱式石棺でも、強引に押し込んで合葬・追葬が多く、規模の優位は変わらない。岡山県下に限ったばあいでも、箱式石棺は小形古墳の主体部によくみられ、その被葬者は古墳を築きうる階層のうちでは比較的の下位と考えられているが、当古墳の被葬者はその内では上位といえよう。これは、棺内面に赤色顔料、それも朱を塗る(付章第三節)こと、



第16図 管玉計測値分布図(注(3)文献より一部改変)

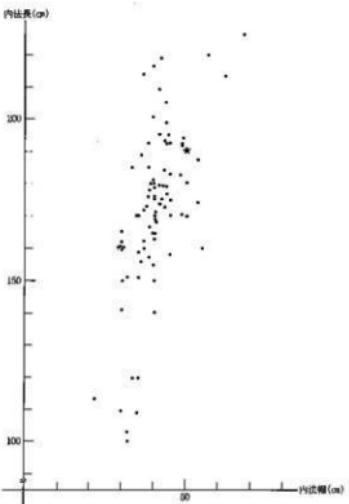
少ないながらも副葬品をもち、しかも鏡、玉類があり、武器こそないが農工具を含んで、一定の組合せを保っていることと、墳丘の復元径約14mは小古墳では大きめなこと、などとも対応する。

じつは、宗形神社古墳の箱式石棺には、大きさ以上に強調すべき特徴がある。それは、箱式石棺の多くが板状に割れ易い石材をそのまま用いているのに対して、当古墳例は固い花崗岩類にもかかわらず整備な板形であり、したがって石材の加工度が高く、組立て（石材間の面合わせ）も精緻なことである。具体的には、粗削りによる一次加工を基本としつつ、板面をより平滑にするためのハツリ、小口面を平滑にし板面との交わりを直角とするためのウチカキなどの二次加工が部分的におよび、さらに可能性として局部的な小口面のミガキが加わる加工法の駆使である。石材接合部の段加工こそないが、独立形態（櫛内埋納型）で上位の石棺との共通性を感じさせる。むろん底板ではなく、側材や蓋石は一枚材でないが、先に述べた石棺の幅が長さの割りに広いこと、内面に鮮やかな赤色顔料を塗ることなども、それに似せる要素となっている。

前期古墳の石棺で、加工した花崗岩を用いるのは、妙見山古墳（京都府京都市・向日市）の組合せ式石棺⁽⁴⁾、それに松岳山古墳（大阪府柏原市）の組合せ式石棺⁽⁵⁾が古くから著名である。どちらも墳長120mクラスの前方後円墳の中心主体に納められた独立形態の石棺で、長持形石棺の祖形といわれている。また中国地方でも、長持形石棺へ似させる意図が窺えて、かつ加工した花崗岩材を用いる石棺として、上小田古墳（広島市）や赤舌古墳（山口市）が指摘されている⁽⁶⁾。宗形神社古墳の石棺はそれらほどには、整ったものではなく、また宗形神社古墳の被葬者がそれらの石棺に關わる政治勢力ともった直接関係の程は判らないが、硬いが身近な花崗岩材を駆使して整美な石棺を追求⁽⁷⁾するという共通の意図のなかでとらえられるのではなかろうか。この点では宗形神社古墳の築造年代は、妙見山古墳や松岳山古墳の前期後半の古い時期（4世紀後半の前葉？）前方後円墳研究会編年⁽⁸⁾の3期）を上限とし、それからどれだけ経り下げて考えうるかという問題になるかもしれない。

一宮地区の丘陵は基本的に花崗岩類からできていて、随所に露岩が確認できるから、身近な石材を採集し、それを宗形神社古墳の石材として用いるのは誰しもが思いつく自然のなりゆきである。しかし、棺の作成には、鉄製工具を用いて固い石材を整美に加工する先進技術を備えた者が携わった。この古墳を直接に支えた集団に、そうした技術保持者も含まれていたのであろう。彼もしくはその技術は、朝鮮半島から海を渡ってきた系統との考え方でてくる。

その点、大陸へのルートである玄界灘に臨んで立地し、4世紀後半に最初のピークをもつ沖ノ島祭



第17図 岡山県内の箱式石棺の大きさ
(星印が宗形神社古墳)

祀遺跡⁽⁸⁾を中核にもつ宗像神社（福岡県大島村・玄海町）と、この宗形神社が、海神である同じ三女神を祀ることは示唆的である。また、箱式石棺は分布が海岸部に自立つことから、海人集団との関係が古くからとりだされている葬法であるし、この地域は地理的に吉備津（海上交通路）の後背地としての側面をもつ土地がらに相違ない⁽¹⁰⁾。さらに、本古墳の初葬が鏡と玉を携えた女性とみられることは、女神のイメージと重なってくる。

しかし、性別の一一致は偶然とも思える。また、岡山県内での箱式石棺の分布は何も海岸部や海人集団の想定地に限られることはない。なにより、本神社が平安時代までは巡式内社としても、ここを境内とする形での神社の起源は不詳であって、古墳と神社の重複は、眼下の平野を基盤とする集団の祭祀の場ゆえの立地の共通性の結果に過ぎないかも知れない。宗形神社古墳と海上交通との関連は展望できるとしても、宗形神社との直接関係にまで議論を進めるためには、もっと手順が必要である。

この古墳の箱式石棺の主軸はほぼ東西（N86° E）である。すなわち埋葬頭位は初葬がほぼ東、追葬がほぼ西である。古墳が立地する小丘陵の尾根筋に直交させた結果ともみられるが、斜面に造られた埋葬主体ではないから、頭位の設定は物理的には自由のはずである。しかるに、東枕は、吉備の初期前方後円墳の北枕後位とは異なり、吉備の弥生墳丘墓に共通し、棺主軸の東西は讃岐など南瀬戸内の前期古墳と共通する状況⁽¹¹⁾といえる。宗形神社古墳の埋葬頭位や棺主軸の解釈の一案は、吉備の前期古墳で既に指摘されている時期的な変化⁽¹²⁾に照らして、当古墳の新しさに解消されることである。またもう一案は、瀬戸内南部との関係を積極的に評価するもので、先に述べた海人集団や海上交通にも繋がってくる。しかし、岡山県下にある前期の小古墳をみわたせば、主軸が東西に近いものもかなりあって、北枕が圧倒するとは限らない。これは中期の小古墳についても同様である。すなわち、吉備の小古墳にあっては、前方後円墳や大古墳ほどには北枕が貴重せず、その埋葬主軸のバリエーションの一つに、弥生時代から一貫する東西があり、当古墳もこれに含まれるとの解釈もできまい。頭位や主軸の差は古墳の階層差の観点でもとらえる必要が思えてならない。

3. 被葬者像

宗形神社古墳は、小規模な円墳で、埴輪も樹立しておらず、築造時期や被葬者の性格を考える手掛かりは極めて少ない。こうした状況はそれ自体が被葬者像を反映したものであるが、やはり副葬品は被葬者に直接つながりうる「存在」と言える。

副葬品は鏡（鏡片）、鉄製農工具類、玉類から構成されており、初葬である2号人骨に鏡片・玉類が、追葬である1号人骨に鉄器類が伴うと考えられる。まず、この副葬品をもとに、二人の人物について考えてみる。

鏡は鏡式は明らかにできなかったが、端部が摩滅、あるいは研磨されているうえ、布に包んで副葬されたらしい。

鏡片副葬に関して正岡睦夫は

1. 弥生時代後期から古墳時代前期に集中すること。
2. 小形の古墳や副次的な埋葬主体から出土する例が多い。
3. 鏡式は後漢代に属する船載鏡が多い。
4. 鏡片は摩滅・研磨されたり、再加工されているものが多く、垂飾等に転用されているものがある

こと。

を指摘し、鏡片の所有者は首長の周辺に位置する人物で、首長が行う祭祀と異なり、弥生時代以来の呪術的な分野に携わっていたのではないかとしている⁽¹³⁾。宗形神社古墳の2号人骨の人物も、こうした特徴に合致し、玉類との組合せとあわせて、司祭的な性格を看取することができる。しかし、鏡片副葬は、完形の鏡を伴わずに鏡片1点のみを副葬する例が多いことや、弥生時代以来伝統的に鏡を副葬する九州以外では、鏡の副葬が一般的になる古墳時代前期になって出現することから、鏡片はあくまで完形の鏡の代用品という側面があることは否定できない。また、鏡片は摩滅、研磨、再加工、転用など長期使用に伴う特徴を具えているものが多く、前代の後漢鏡が多いことと合わせて、いわゆる「伝世鏡」と共通する。したがって、鏡片の所有者が主催する祭祀は完形の鏡による祭祀と本質的に変わるものではないが、祭祀の規模、集団の範囲やレベルは異なると思われる。

鉄器類はいずれも柄の木質や表着痕が認められず、柄のない状態で副葬されたと判断できる。これは鉄器類が被葬者、すなわち1号人骨の個人的な愛用品などではなく、鉄器の所有、管理やその鉄器に表される農工集団の掌握を象徴したものと思われる。

以上から、宗形神社古墳の被葬者は、決して有力とは言い難いが、小集団の長の立場にあって、2号人骨が集団の祭祀を、1号人骨が生産を掌握する人物であったと想像される。

つぎに、この二人の人物はどのような関係であったのだろうか。

人類学的所見からは、2号人骨は壮年前半の女性、1号人骨は壮年後半の男性と判断されている（付章第2節）。また、出土状況から2号人骨が初葬、1号人骨が追葬とみられ、1号人骨追葬の際に2号人骨の脛骨、腓骨が南側壁間に動かされているようだが、その解剖学的位置は大きく動いていない。田中良之によると、遺体の「腐朽が完了かそれに近いほど進行するには10年程度」⁽¹⁴⁾とされ、2号人骨と1号人骨の埋葬の間隔は10年以内と推定される。したがって、二人の男女はほぼ同年代であった可能性が高い。しかも同一の石棺に葬られていることからごく近しい関係であったことは想像に難くない。したがって、夫婦か、あるいは兄妹・姉弟であろう。

複数埋葬の原理がどのようなものであったかは様々な観点から議論がなされており、男女二人の合葬例についても夫婦、兄妹・姉弟、あるいは出自表現によるものなどの説が提示されている。そのなかで、田中良之は主に歯冠計測値を用いて、被葬者間の血縁関係の有無を検討することから古墳時代前半期における男女合葬はキヨウダイ関係が原則であるとしている⁽¹⁵⁾。田中の研究は科学的な分析を体系的に導入した点で大きく評価できる。しかし、副葬品も豊富で、土層の堆積などから追葬の間隔なども検討しやすい古墳時代後期の事例に比べ、前期の事例は仮定的的前提に頼る部分も多く問題が残される。また、同性同士の合葬例に比べ男女の合葬例が多いことや、近親婚の例からキヨウダイ原則に否定的な見解もある。いずれにせよ、宗教的権威と政治的権威をごく近しい関係の人物で分有、あるいは共同で担うような政治体制が、古墳時代前期にはあり得たことが指摘できる。

4. 一宮地域での位置

周辺の古墳との関わりから、被葬者の位置について考えてみたい。一宮地域は古代の律令制の行政区分では津高郡に含まれる。その津高郡は、現在の岡山市津高地区・一宮地区・御津町・建部町の一部、加茂川町に及ぶ広大な範囲であり、そのうち、古墳時代前期の大形古墳はこの一宮地域に集中し

古 墳	墳 形	墳丘規模	主 体 部	副 葬 品
一宮天神山1号墳	円墳	径20m	堅穴式石棺5.5m×0.8m	三角縁仏獸鏡・鉄刀・土師器
一宮天神山2号墳	前方後円墳	墳長60m以上	(A主体) 堅穴式石棺約4m×1m	斜縁獸形鏡・鉄刀・鉄劍・鉄斧・銅鏡
			(B主体) 堅穴式石棺3.3m×0.6m	御尚文鏡・弦文鏡・硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ 鉄鎌・鉄斧・鉄槍・刀子
宗形神社古墳	円墳?	径10m?	箱式石棺1.8m?×0.5m	鏡片・硬玉製勾玉・ガラス製勾玉・ガラス小玉・ 碧玉製管玉・鉄斧・鐵鎌・鐵先・刀子

表3 宗形神社古墳・一宮天神山古墳群比較表

ている。宗形神社古墳周辺の古墳時代前期の古墳には飯盛山古墳（前方後円墳、35m）⁽¹⁶⁾、一宮天神山1号墳（円墳、20m）…一宮天神山2号墳（前方後円墳、60m以上）⁽¹⁷⁾などが存在するが、副葬品の内容が少しでも判明している古墳は一宮天神山1号墳、同2号墳のみである。一宮天神山2号墳の副葬品は、盜掘などのため全貌は不明ながらも、A主体の盗掘排土から斜縁獸形鏡が、大井石を覆う粘土中から鉄刀、鉄劍、鉄斧、銅鏡が、B主体からは撰文鏡、櫛齒文鏡、首飾りと向腕の胸飾りに相当する3群の玉類、鎌・斧・槍・刀子などの鉄器類が出土している。副葬品の組み合わせは宗形神社古墳のものによく似ているが、墳形、墳丘規模に加え副葬品においても質・量とも凌駕する。また、一宮天神山1号墳は墳丘こそ径20mほどの円墳とされているが、主体部は長さ5.5mの堅穴式石棺であり、副葬品も、やはり盜掘等により全貌は不明ながら、三角縁仏獸鏡1面、鉄刀などが存在した。

これらの古墳の被葬者は、直接的には各々の小地域集団を代表する首長と思われる。同時に、墳形、墳丘規模、副葬品とも宗形神社古墳などとは一線を画す内容を持つことから、そうした小集団の連合体である地域集団を代表する人物でもあったと考えられる。その勢力範囲がどのようなものであったかは難しいが、郡内には一宮天神山2号墳などに匹敵する同時期の古墳が存在しないことから、津高郡の範囲程度と想定しておきたい。

ところで、飯盛山古墳、一宮天神山2号墳以降、この地域には前方後円墳など大規模な古墳が存在しないことは第1章でも触れた。こうした状況は飯盛山古墳、一宮天神山古墳以降の、吉備や畿内中枢に跨る首長の政治的再編制の中で、当地からは地域的な代表権を持った首長を出しえなかつた、あるいは大規模古墳を造営しろる政治的、経済的力量を急速に失っていったものと評価される。

5. ま と め

宗形神社古墳は、1997年7月7日に神社の整備工事中に偶然に発見された未盗掘の古墳で、保存のための緊急発掘を行なったものである。復元径約14m、同高約2.5m、円墳とみられ、小独立丘陵上に単独で存在した可能性が強い。小規模墳のうちではやや大きめである。唯一とみられる埋葬主体は箱式石棺で、内法の長さ190cm、幅50cmと大形の規模をもつ。整美な花崗岩の板石を組んだもので、高い石材加工技術の存在が窺える。棺材の内面と棺床には赤色顔料が認められ、とくに棺材に塗られたのは、この種の古墳や棺では例が少ない水銀朱であった。棺内には二体の人骨が互い違いに重なって残っていた。先ず東枕の女性が、鏡片と玉類を伴って埋葬され、鉄製の農工具を枕石の脇に伴う西枕の男性が追葬されたと考えられる。

鏡は鏡式が特定できない。副葬鏡片には小形鏡が多いなか、珍しく中形鏡で、しかも紐部である。

成人の男女二体を組合せた埋葬は、箱式石棺に複数埋葬を行なう小古墳での多数派⁽¹⁸⁾で、その典型例に加えられる。夫婦であったにせよ、兄弟・姉弟にせよ、副葬品が二人に分有され、それに示される属性が各々に極み分けることは注目される。大首長と異なって、前期小古墳に埋葬される階層は、集団内部での卓越や首長権の確立が進んでおらず、男女の格差も未だ生じていない⁽¹⁹⁾ことを本例もよく示している。ただ、鏡と玉に示される宗教的権威を備えるのが女性で、鉄製農工具に示される世俗的権威をもつのが男性であるのは、性差ゆえのことではなかろうか。この観点で、女王卑弥呼と「男弟」の関係がよく引き合いにだされるが、同じような首長権の性的分掌が小墳の被葬者層では宗形神社古墳の時期まで続いているかも知れない。もし二人が兄妹・姉弟なら、なおのことである。

築造時期は古墳時代前期後半から中期前半と幅をもって考えた。副葬品の少なさと合わせて、時期を絞り難くしているのは、保守的な要素と先進的な要素の混在である。これがまた、この古墳の特徴といってよく、吉備での別地域のようには傑出した前方後円墳がない一宮地域北部の特性を示すのだろう。とくに玉と鏡の伝世の可能性、とくに破片となっても大切に保管された鏡の状況は、畿内政権ないしは吉備内部の上位の首長との政治関係のなかで、ここにあった小集団・小首長が久しく新品入手の途を閉ざされたことの裏返しなのかもしれない。

一宮地域での古墳の発掘例が少ないなか、小首長の埋葬を具体的に示した本発掘の意義は大きい。

古墳としての認識はなかったとしても、荒してはならぬ境内の一部として、この古墳が未盗掘で伝えられてきたのは、地域の先人の方々の功績である。今回の工事を経ても、再び氏子や地元町内の皆様のご尽力で保存されることになったこの古墳が、了孫に引き継がれ、地域の歴史を生に語るものとして、活用されることを祈らずにはいられない。

(第5章1・3・4=安川、2・5=乗岡)

注

- (1) 正岡隆夫 1979「鏡片断幕について」『古代学研究』90 古代学研究会
- (2) 高橋進一氏の直接の教示による。
- (3) 高橋進一 1992「玉作遺跡と主製品」近藤義郎編「吉備の考古学的研究(下)」山陽新聞社
- (4) 梅原末治 1955「向日町妙見山古墳」「京都府文化財調査報告」第廿一冊 京都府教育委員会
- (5) 小林行雄 1957「河内松岳山古墳の調査」「大阪府文化財調査報告書」第五輯 大阪府教育委員会
- (6) 間壁忠彦 1994「石棺から古墳時代を考える」同朋社出版
- (7) 注(6)と同じ。
- (8) 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」「前方後円墳集成」中国四国編 近藤義郎編 山川出版社
- (9) 岡崎敬ほか 1979「宗像沖ノ島」吉川弘文館
- (10) 新川登鬼男 1991「宗像と宇佐」「新版古代の日本」九州・沖縄では、岡山市のこの宗形神社の存在を挙げて、宗像岩配下の羅崎海人の運輸・交通上の役割である可能性を指摘する。
- (11) 北條芳隆 1987「墳丘と方位からみた七つ塚1号墳の位置」「岡山市七つ塚古墳群」近藤義郎編 七つ塚古墳群発掘調査会
- (12) 注(1)と同じ。
- (13) 注(1)と同じ。
- (14) 田中良之 1995「古墳時代親族構造の研究—人骨が語る古代社会—」柏書房
- (15) 注(1)と同じ。
- (16) 草原孝典 1993「位置と環境」「小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会
- (17) 錦木義昌・亀田修一 1986「一宮天神山古墳群」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会編 岡山県
- (18) 今井亮 1984「若干の考察」「竹田古墳群」鏡野町教育委員会
- (19) 注(18)と同じ。

付章 第1節 鏡片に付着する繊維製品について

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
小林青樹

宗形神社古墳出土の鏡片に付着した繊維製品は、残存状態が悪く劣化が激しい。繊維自体も、ほとんどが接着しており断片的に分布している。調査時の観察では、やや現状よりも付着範囲が大きく、国ではその段階での観察結果を考慮して修正をしている。サンプルを抽出し、樹脂で包埋して観察することが困難なため、実体顕微鏡での観察による所見を記すことしたい。

繊維は鏡面において散在し、大小合わせて約12カ所の付着が確認される。ここでは、図の鏡片のほぼ中央を境に上部をA、下部をBとする。経糸の状況に着目すると、AとBでは方向が異なるようで、鏡を複数の繊維で覆っていたか、包んだ際に生じたずれの可能性が指摘できる。なお、断面部は摩滅が激しく繊維付着が認められない。したがって、完形の鏡の状態で繊維が付着した後に破鏡となつたのか、破鏡となってから付着したのかについては、結論を保留せざる得ない。こうした繊維等の付着した時期の検討は、鏡等の金属器類の伝世とも絡んでくるので今後注意されるべきであろう。

付着する繊維は平織りであり、染色は確認できない。1cmあたりの本数でみる繊り密度は、確実な箇所で復元すると、経糸が約30から35、緯糸が約30である。この数値は、布日順郎氏が指摘する古墳時代の絹製品の値に近く（布日1988他）、大麻や苧麻ではないようである。

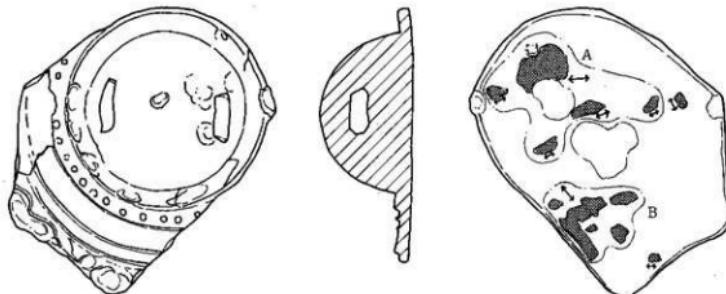
岡山県内で繊維が付着した資料は、月の輪古墳⁽¹⁾や浦間茶臼山古墳⁽²⁾から出土した鉄器類、殿山11号墳⁽³⁾出土の鏡などが知られ、古墳前期の古いところから中期の中頃までにわたる。繊維が付着する資料は、本例を加えてもまだ数少なく、今後の資料増加が待たれる。

参考文献 布日順郎 1988『絹と布の考古学』雄山閣考古学選書28

注(1) 近藤義郎編 1960 『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会

(2) 近藤義郎・新納 泉耀 1991 『浦間茶臼山古墳』浦間茶臼山古墳調査團

(3) 平井 勝 1982 「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47 岡山県教育委員会



第18図 鏡片付着繊維の分布 (S = 1/1)

第2節 宗形神社古墳出土人骨

岡山理科大学総合情報学部
川 中 健 二

岡山市大庭に所在する宗形神社古墳は、1997年7月に神社境内の整備工事中に発見され、その保護を図るために、岡山市教育委員会によって応急の調査が実施された。その際に、箱式石棺の主体部から、2体分の人骨が出土した。この古墳の造築年代は4世紀後半～5世紀前半と判断されている。

なお、本古墳出土人骨は、調査後に神社に戻され、再埋葬された。

1. 第1号人骨

保存状態

頭蓋骨： 全体によく保存されている。欠損しているのは、左右の乳様突起の先端、大後頭孔後縁、左右の下頸枝後縁である。下頸枝後縁では、左右とも、下顎頭および下顎角が欠けている。

胸骨： 椎骨の中では、第1頸椎はほぼ完全に保存されている。第2頸椎は、歯突起と椎体および上関接面を含む部分が保存され、左右の横突起から後ろの部分はすべて欠けている。それ以外の頸椎はすべて破片になっており、3個の椎体が判別できる。胸椎はすべて破片になり、6～7個の椎体が残されている。腰椎はすべて消失している。胸骨は、胸骨体の右半分が残っているだけである。肋骨はすべて破片になっている。

上肢骨： 右鎖骨は両端を欠く中央部だけが残っており、左鎖骨は破片になっている。肩甲骨は、右の関接窓や鳥口突起を含む外側角の部分が残存している。この部分には外側縁の上部と肩甲棘外側基部が続いている。また、右肩甲骨の肩峰が、遊離して残存している。左肩甲骨は完全に消失している。右上腕骨は両端を除く骨体が残り、左上腕骨は遠位端と頭の後半を欠いている。前腕の骨の中では、右橈骨の橈骨頭を含む近位部約8cmだけが残っている。手の骨は、右の第2～5指の内の2本の中手骨が残っている。

下肢骨： 寛骨は左右とも恥骨の部分だけが残っている。左右とも寛骨臼の前下方部から恥骨結合部までの部分とそれから後下方にのびる恥骨下枝が残されている。左大腿骨は、骨頭を含む近位部よりの約1/2が残っているが、骨頭の後半から大小両転子および骨体の後半を欠いている。右大腿骨は遠位部約1/4を欠いているが、それ以外の部分の保存状態は良い。また、右大腿骨の外側頭の部分が、遊離して残存している。膝蓋骨は左右とも残っていない。左脛骨は内外両側頭や腓骨開節面を含む近位端を欠いているが、脛骨粗面から下の骨体と遠位端は残存している。右脛骨も骨体はよく保存されているが、近位端では内頭が欠け、遠位端では内頭を含む内側部が欠けている。左腓骨は骨体下半部が残っているが外頭を欠き、骨体中央部の部分の骨は破片になっている。右腓骨は腓骨頭と外頭の外後側部を欠いているが、それ以外の部分はよく保存されている。足根骨では、左右の距骨、左右の（踵骨隆起を欠く）踵骨、左右の舟状骨および右の内側楔状骨、中間楔状骨、外側楔状骨、立方骨が保存され、その他少数の足根骨の破片も残っている。第2～3中足骨の内の1本の近位端は残っているが、それ以外の足の中足骨と指骨は残っていない。

計測的・非計測的特徴

頭蓋: 長幅示数（77.8）は中頭型、長高示数（77.3）は高頭型、幅高示数（99.3）は狭頭型に属する。頭蓋冠の三主要縫合のうち、冠状縫合と人字縫合とは全長に渡って癒着は認められない。残りの矢状縫合では、冠状縫合に近い部分ではまだ癒着は起こっていないが、それより後方のラムダに至る部分では癒着が始まり、とくに頭頂部とラムダに近い部分では癒着が完了している。

顔面頭蓋: コルマン顔面示数（76.4）とコルマン上顔面示数（46.4）とは低型、ウイルヒヨウ顔面示数（100.9）とウイルヒヨウ上顔面示数は過低型に属する。眼窩示数（左73.3、右75.6）はともに低型、鼻示数（51.0）は広型に属する。右眼窩上縁には前頭孔があるが眼窩上孔は見えない。左眼窩上縁には前頭切痕と眼窩上孔とが存在する。

下頸骨と歯: 下頸体右側に2個の小孔があり、そのうち1個は副オトガイ孔である。第3大臼歯は左上頸だけに萌出を完了しているが、その咬耗はほとんど進んでいない。他の大臼歯は未萌出である。その他の歯はすべて残っているが、下頸の右第2切歯は歯根だけが残っている。（左上頸第3大臼歯を除く）すべての歯の咬合面で象牙質の露出が認められる。しかし、臼歯部の象牙質は点状に露出している状態である。咬合は鉄状咬合である。

四肢骨: 左大腿骨の上骨体断面示数（65.6）は超扁平型、左右の脛骨の脛示数（60.6）は扁平型に属する。四肢骨の筋肉付着部（上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線など）はいずれも強大である。左右の恥骨下枝で作られる恥骨下角は小さい。

性・年齢の推定

残存している寛骨の恥骨部の形状や、四肢骨の筋肉付着部の強大な点から、本資料が男性であることは明らかである。頭蓋骨の主要縫合の癒着の程度や、歯の咬耗の程度などから壮年期の後半と推定することができる。

2. 第2号人骨

保存状態

第2号人骨の保存状態は、第1号人骨のそれに比べて、良くない。

頭蓋骨: 4つの比較的大きい破片が残存している。最も大きい破片は、前頭骨と左右の頭頂骨で構成されており、この中で前頭骨はほぼ全体が残っているが、頭頂骨は、左右とも、前方部約1/2で側頭線から上の部分だけが残っている。冠状縫合はほぼ全長にわたって保存されているが、矢状縫合は前方部約1/2だけが保存されている。右の頭頂骨の下方には、側頭骨鱗部の一部が続いて残り、鱗状縫合の前方部約1/2が保存されている。上顎骨は左右とも口蓋突起とその前下方に続く歯槽突起が残っており、左ではその上に上顎体の顔面部の一部が残り、前頭突起まで続いている。上顎骨歯槽突起には、左右の第1、2切歯、左の大歯、左右の第2小白歯が残っている。右の大歯および左右の第1小白歯の歯槽はまだ閉鎖していない。その外側には頬骨の体の一部も続いている。第3の破片は右側頭骨の岩様部である。第4の破片は下顎骨の一部で、左右とも第1切歯から第1大臼歯までを残した下顎体の中央部であるが、下顎体の底部はオトガイの部分だけが残り、その外側の部分は左右とも欠けている。

6本の遊離した歯が残っている。

胸骨： 数本の肋骨が破片になって残されているだけで、それ以外の胸骨は残っていない。

四肢骨： 左右の人腿骨および左右の脛骨のそれぞれ一部と左距骨の一部が保存されているだけである。大腿骨は2本とも遠近両端を欠く骨体だけが保存されている。脛骨も左右とも両端を欠き、右脛骨は骨体の後面も欠いている。左距骨は、ほぼ完全な距骨頭と、それに続く距骨滑車の内側部約1/2が残されている。

計測的・非計測的特徴

頭蓋骨と歯： 特記すべき計測的特徴はない。前頭骨の眉間から左右の眉弓にかけての隆起は、第1号人骨の隆起に比べて、著しく弱い。歯の咬耗の程度は、第1号人骨の咬耗に比べて弱く、第1大臼歯でも象牙質がわずかに露出しているに過ぎない。

四肢骨： 右大腿骨の中央断面示数(104.0)は、第1号人骨の示数(82.8)に比べて大きく、扁平性の程度は著しくない。左脛骨の經示数(69.0)は中型に属する。これらの骨に残されている筋肉付着部(大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線)は、第1号人骨のものに比べて弱い。距骨も、第1号人骨のものに比べて、かなり小さい。

性・年齢の推定

本人骨の性を推定するための材料は乏しいが、眉間から眉弓にかけての隆起が弱いこと、四肢骨の筋肉付着部が弱いこと、および距骨が小さいことなどから、女性と推定してよいと思われる。冠状縫合と残された矢状縫合の癒着が始まっていないことや、歯の咬耗の程度が弱いことなどから、壮年の前半と推定してよいだろう。

調査の機会を与えていただいた岡山市教育委員会、および発掘担当者の桑岡実氏に感謝の意を表したい。

表4 宗形神社古墳出土人骨計測値および示数

1. 頭蓋骨

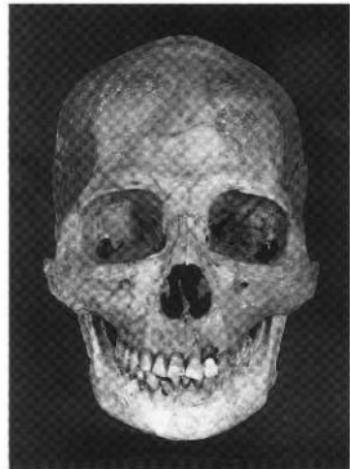
第1号人骨（男性）

1	頭骨最大長	176	40	顎長	104
2a	ナジオン・イニオン長	165	42	下顎長	108
3	グラベロ・ラムダ長	169	43	上顎幅	104
5	頭骨低長	105	44	両眼窩幅	102
8	頭骨最大幅	137	45	頬骨弓幅	140
9	最小前頭幅	87	46	中顎幅	106
10	最大前頭幅	102	47	顎高	107
11	両耳幅	125	48	上顎高	65
12	最大後頭幅	113	50	前眼窩間幅	17
17	バジオン・ブレグマ高	136	51	眼窩幅 左	45
20	耳ブレグマ高	113		右	45
22	ナジオン・イニオン線上穹頂高	105	52	眼窩高 左	33
23	頭骨水平周	504		右	34
24	横弧長	309	54	鼻幅	25
26	正中矢状前頭弧長	117	55	鼻高	49
27	正中矢状頭頂弧長	117	57	鼻骨最小幅	7
28(1)	正中矢状上鱗弧長	80	57(1)	鼻骨最大幅	15
29	正中矢状前頭弦長	106	60	上顎歯槽長	48
30	正中矢状頭頂弦長	105	61	上顎歯槽幅	64
31(1)	正中矢状上鱗弦長	70	62	口蓋長	42
32(1)	前頭傾斜角	61	63	口蓋幅	43
32(5)	前頭彎曲角	141	64	口蓋高	6
33(1)	ラムダ・イニオン角	88	69	頤高	27
8/1	頭骨長幅示数	77.8	72	全顎面角	80
17/1	頭骨高示数	77.3	73	鼻側面角	87
17/8	頭骨幅高示数	99.3	74	歯槽側面角	58
20/1	長耳ブレグマ高示数	64.2	47/45	コルマン顎面示数	76.4
20/8	幅耳ブレグマ高示数	82.5	47/46	ウイルヒヨウ顎面示数	100.9
22/2a	穹頂示数	63.6	48/45	コルマン上顎面示数	46.4
9/10	横前頭示数	85.3	48/46	ウイルヒヨウ上顎面示数	61.3
9/8	横前頭頭頂示数	63.5	52/51	眼窩示数 左	73.3
27/26	矢状前頭頭頂示数	100.0		右	75.6
29/26	矢状前頭示数	90.6	50/44	前眼窩間示数	16.7
30/27	矢状頭頂示数	89.7	54/55	鼻示数	51.0
			61/60	上顎歯槽示数	133.3
Vertex Rad. (VRR)		126	63/62	口蓋示数	102.4
Nasion Rad. (NAR)		92	45/8	横前頭示数	102.2
Subsp. Rad. (SSR)		94	9/43	前頭両眼窓示数	83.7
Prosthetic Rad. (PRR)		100	9/45	頬前頭示数	62.1
			57/57(1)	横鼻骨示数	46.7

2. 四肢骨

a. 第1号人骨(男性)

		左	右			左	右
鎖骨				大脛骨			
6	中央周	—	40	6	中央矢状径	23	26
				7	中央横径	25	25
肩甲骨				8	中央周	78	81
12	関節窩長	—	35	6/7	中央断面示数	92.0	104.0
13	関節窩幅	—	28				
13/12	関節窩長幅示数	—	80.0	脛骨			
				8	中央最大径	29	—
上腕骨				8a	榮養孔部最大径	29	—
5	中央最大幅	19	21	9	中央横径	18	—
6	中央最小幅	15	16	9a	榮養孔部横径	20	—
7	骨体最小周	55	58	10	骨体周	75	—
7a	中央周	58	63	9a/8a	脛示数	69.0	—
6/5	骨体断面示数	78.9	76.2	9/8	中央断面示数	62.0	—
大腿骨							
6	中央矢状径	—	24				
7	中央横径	—	29				
8	中央周	—	83				
9	骨体上横径	—	32				
10	骨体上矢状径	—	21				
15	頸垂直径(高)	—	30				
16	頸矢状径(幅、深)	—	23				
17	頸周	—	90				
6/7	中央断面示数	—	82.8				
10/9	上骨体断面示数	—	65.6				
16/15	頸断面示数	—	76.7				
脛骨							
8	中央最大径	30	28				
8a	榮養孔部最大径	33	33				
9	中央横径	19	19				
9a	榮養孔部横径	20	20				
10	骨体周	81	77				
10b	最小周	73	70				
9a/8a	脛示数	60.6	60.6				
9/8	中断面示数	63.3	67.9				
腓骨							
2	中央最大径	16	15				
3	中央最小径	9	10				
4	中央周	45	43				
3/2	中央断面示数	56.3	66.7				



第1号人骨頭蓋骨前面觀



第1号人骨頭蓋骨側面觀



第1号人骨頭蓋骨上面觀



第2号人骨頭蓋骨前面觀

第19圖 宗形神社古墳出土人骨頭蓋骨

第3節 赤色顔料について

別府大学

本田光子

岡山市宗形神社古墳から出土した赤色顔料について、その材質と状態を知るために顕微鏡観察および蛍光X線分析を行なった。確認できた赤色物は鉛物質の顔料であり、酸化第2鉄を主成分とするベンガラと、硫酸水銀（赤）を主成分とする朱の2種が用いられている。

試料

試料は、箱式石棺の東側蓋石の内面に塗られていた赤色部分と棺床面の赤色物である。蓋石については石材小破片、床面については土塊の状態で提供を受けた。実体顕微鏡観察では、朱と思われる赤色物が蓋石表面の凹部に溜まった状態が観察された。棺床の赤色部分は、土砂にベンガラと思われる赤色物が混じり込んだ状態で、赤色物だけが凝縮している部分は僅かである。蓋石は針先につく程度の試料を採集し、棺床は赤色部分および土砂から任意の部分を顕微鏡観察の検鏡試料とした。蛍光X線分析では、蓋石はそのままで測定を行ない、床面については赤色物の集合している小塊および土砂の任意の部分を試料とした。

顕微鏡観察

赤色顔料の有無・状態・種類・粒度などを観察する目的で、光学顕微鏡（透過光・落斜光40~400倍）による観察を行なった。蓋石には朱の特徴（質感、透明度など）をもつ赤色顔料粒子が認められ、顯著なベンガラ粒子は認められなかった。棺床の赤色物と土砂からはベンガラと朱の両者が観察された。ベンガラは、管状粒子を含むものと含まない二種類が認められた。朱は、実体顕微鏡下で顔料だけ集合した小塊が観察されなかったことからも判るように、非常に少ない量が散見された。

蛍光X線分析

主成分元素の検出を目的に、別府大学設置の堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESS A500を用いて実施した。両資料とも赤色顔料の主成分元素として水銀と鉄が検出されたが、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。他にケイ素、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどが検出されるが、それらは主に混入の土砂に由来すると考えられる。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるもので、赤色顔料山本のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

まとめ

以上の結果、蓋石内面には朱が塗られ、棺床にはベンガラが散布された可能性が高い。棺床から検出された朱は量が非常に少なく、本来遺骸に使われていた朱が床面で検出されたのか、棺内面に塗布されていた朱が床面に落ちたものか不明である。また、ベンガラについて二種類が検出されているが、これが埋葬回数に由来するのか、本来混合されていたのか、今回の資料だけからは不明である。なお、一般的に、弥生時代後期以降の墳墓では「埋葬施設にはベンガラ、遺骸には朱」という赤色顔料の使い分けがあるが、本遺跡ではこの約束事は行なわれていないわけで、二種のベンガラが同時に認められることも含めて、赤色顔料使用の観点から非常に興味深い資料であり、今後も検討を続けたい。

調査の機会をいただいた岡山市教育委員会、同乗岡実氏・扇崎由氏に感謝いたします。

第4節 芳賀新池古墳の測量調査

芳賀新池古墳は岡山市芳賀2137-1に所在する。近隣の開発に伴う埋蔵文化財の存在状況確認の過程で1997年に発見された古墳である。宗形神社古墳に近く、低地部を臨む尾根上に単独で立地すること、主体部が箱式石棺であることなど共通点も多いことから、あわせて報告する。

測量は、1998年11月5日に乗岡実と安川満が担当して行った。墳丘脇に任意の点を定めて、任意の水準による25cm間隔の等高線を求めた平板測量である。国土座標、海拔高度の計測は行わなかった。方位は磁北を用いた。

1. 芳賀新池古墳の概要

古墳は南北に延びる尾根の末端付近に立地する。標高は42~43m、麓の谷部との比高差は15m程度である。尾根末端部は宅地造成により削平されており、古墳も墳丘の山側およそ三分の一を残すのみとなっている。直径10m程度の円墳と考えられ、高さは現状で50~75cmを測る。周囲、あるいは山側に周溝を巡らせているようだが、墳丘の東側以外ははっきりしない。墳頂部の崖面となった位置に箱式石棺1基が露出している。

箱式石棺は東西方向を主軸とするが、東側小口と南北側壁1石を残すのみである。石材は厚さ10~15cm程度の花崗岩類の板石

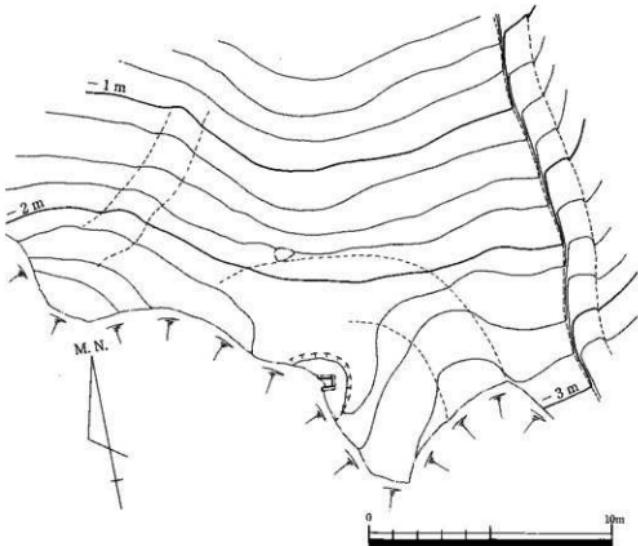
で、土の付着によって観察し難い部分もあるが、長方形によく整えられているよう見える。内法は幅39cmを測る。床面はほとんど残存していないが、石棺上端から約30cm下に径2~5cm大の円窪が多数露出しており、棺床には縞が敷かれていたとみられる。また、箱式石棺が墳丘の北側に偏っているように観察できるところから、複数の主体部が存在した可能性もある。



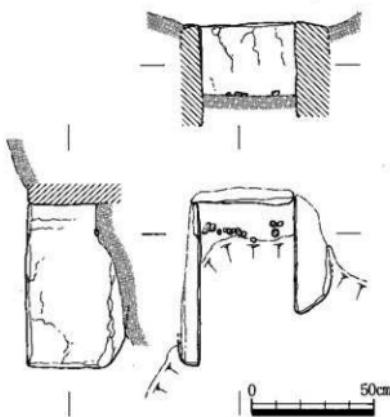
第20図 芳賀新池古墳の位置 (S = 1 / 5,000)

2.まとめ

芳賀新池古墳は、箱式石棺を主体部とし、直径10m程度の円墳と推定される。



第21図 芳賀新池古墳墳丘測量図 (S = 1/200)



第22図 箱式石棺実測図 (S = 1/20)

築造時期に関しては、副葬品、埴輪など遺物が全く知られていないため確証がないが、立地や主体部などの類似からすれば宗形神社古墳に近い時期と思われる。先行、後続する古墳は現在のところ隣接地では確認されていない。南に3kmほどの芳賀佐山周辺には、丘陵上にそれぞれ100~300mの間隔をあけて3基の方墳及び方墳状地形が確認されているが、いずれも詳細は不明であり、その間の距離からも芳賀新池古墳を含めて系列的な展開をしているものとは考え難い。当古墳は古墳の規模、立地などから、宗形神社古墳などと同様、眼下の谷部に生活基盤を持つ小集団の首長墓と捉えられる。

(付章第4節 安川)



1. 参道から見た宗形神社

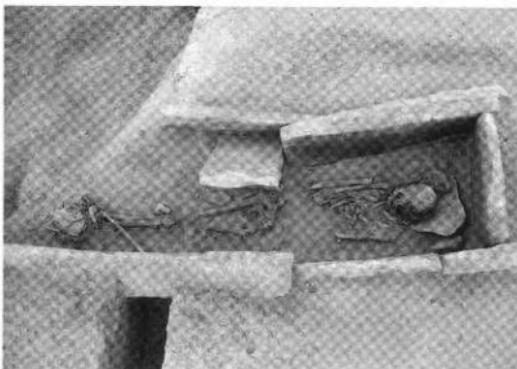


2. 墳丘と社殿（背後）

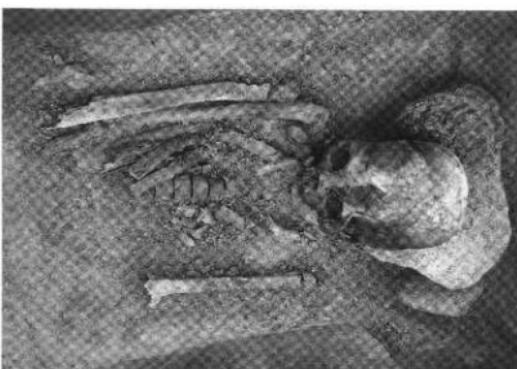


3. 箱式石棺の蓋石

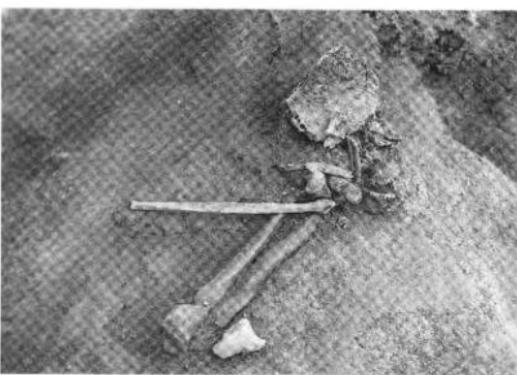
図版 2



1. 棺内の人骨



2. 1号人骨上半身

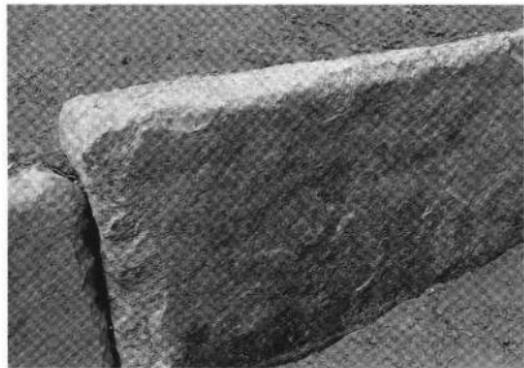


3. 2号人骨頭部と1号人骨脚部

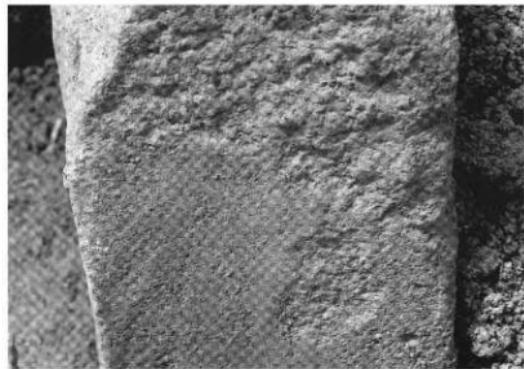
1. 墓頂と箱式石棺



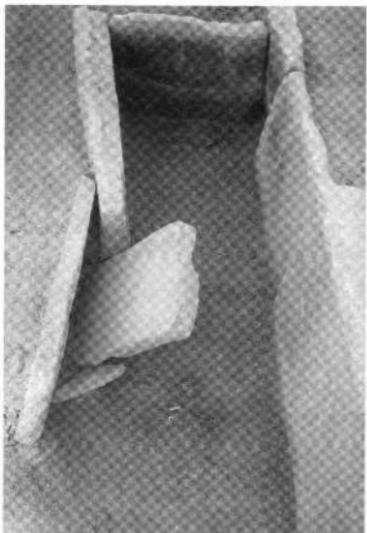
2. 石棺北辺石材の加工痕



3. 石棺東小口材の研磨？痕



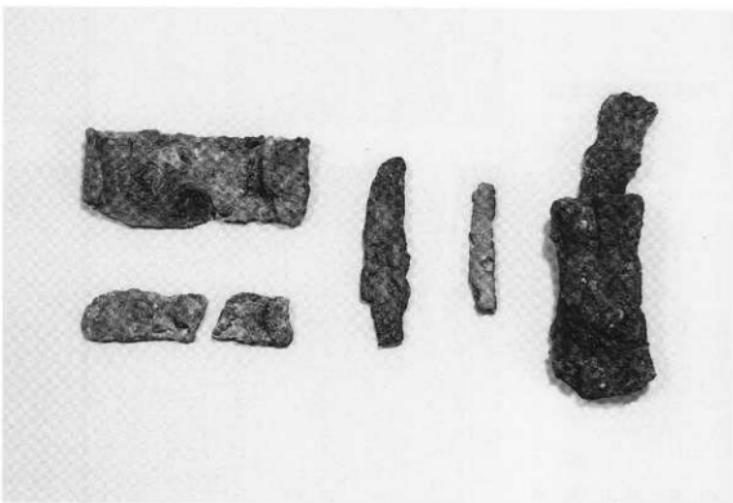
図版 4



1. 人骨取り上げ後の石棺



2. 復元後の石棺



3. 副葬鉄器

報告書抄録

ふりがな	むなかたじんじやこふん							
書名	宗形神社古墳							
編著者名	乗岡 実・安川 満							
編集・発行機関	岡山市教育委員会(生涯学習部文化課)							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 tel 086-225-4211							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'."	東經 °'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
むなかたじんじや 宗形神社古墳	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 大庭193	市町村	遺跡番号	34度 41分 36秒	133度 51分 43秒	1997.7.9 1997.7.19	10	神社境内の整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
むなかたじんじや 宗形神社古墳	古墳	古墳	墳丘 箱式石棺	青銅鏡・玉類 鉄斧		<ul style="list-style-type: none"> ・人骨二体が良好に遺存 ・鏡片副葬 ・石棺材の加工度が高い 		

宗形神社古墳

平成11年3月31日

発行 岡山市教育委員会
岡山市大供一丁目1番1号
製作編集 岡山市教育委員会文化課
印刷 佛創文社
